

京都府埋蔵文化財情報

第 67 号

弥生時代石器研究の実践—東土川遺跡出土例から—	中川 和哉	1
浦入遺跡群A地点の発掘調査	筒井 崇史	7
長岡京造営に伴う河川改修事業	小池 寛	14
内里八丁遺跡第10次の発掘調査	古瀬 誠三・森下 衛・柴 暁彦	21
棕ノ木遺跡第3次の発掘調査	森島 康雄	28
—平成9年度発掘調査略報—		34
13. 生野内城跡	16. 茶カス古墳群	
14. 横枕遺跡	17. 鳥谷古墳群	
15. 井町古墳群		
資料紹介 長岡京出土の古櫃について	野島 永	43
誌上遺物展示 4. 京都府向日市山開古墳の子持勾玉		49
府内遺跡紹介 81. 飯岡車塚古墳		52
長岡京跡調査だより・64		54
センターの動向		57
受贈図書一覧		59

1998年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版1 長岡京造営に伴う河川改修事業



(2) 第4トレンチ奈良時代杭列空中写真（北東から）



(1) 第4トレンチ奈良時代杭列空中写真（南西から）

巻頭図版2 長岡京造営に伴う河川改修事業



(1) 第4トレンチ奈良時代
杭列SX36675
検出状況（北東から）



(2) 第4トレンチ奈良時代
杭列SX36675
検出状況（北東から）



(3) 第4トレンチ奈良時代
杭列SX36675
検出状況（南東から）

巻頭図版3 内里八丁遺跡第10次の発掘調査



(1) 調査地全景 (南東方向上空から)



(2) E地区第3遺構面遺構検出状況 (北方向上空から)

弥生時代石器研究の実践

— 東土川遺跡出土例から —

中川和哉

1. はじめに

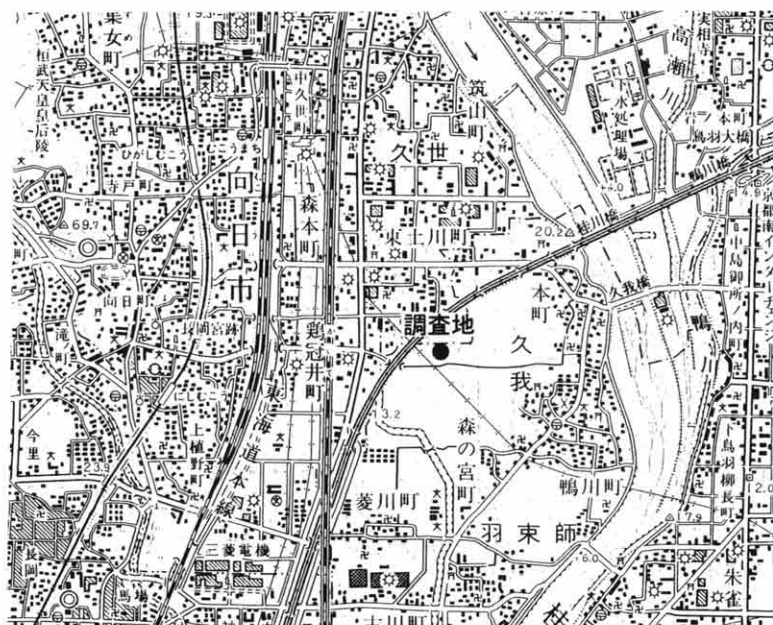
弥生時代の石器研究の現状を一瞥すると、石器の種類や形態に重点を置いたものが目立つ。土器の場合、遺構の数と同じくらいの詳細な時期区分がなされているが、同じ遺跡内の出土遺物であるにもかかわらず石器の組成等は、弥生時代前期あるいは中期の組成といった雑駁な論議がなされている。報告書中でも石鏃等の形の整ったものだけが包含層からでたにもかかわらず掲載され、遺構内出土の石片が全く載っていないことも珍しくない。剝片や碎片を元にどのようなことが判るかに付いて考察してみたい。

今回分析対象となる遺物の出土した東土川遺跡は、京都市南区久世東土川町に位置する縄文時代から中世に至る複合遺跡である。当センターは1995年から1997年度にかけて約50,000㎡の発掘調査を実施した^(注1)。弥生時代の遺構として水田、弥生時代中期の方形周溝墓、断面V字形の環濠等を検出した。S K 385613は1996年度発掘調査のPA工区B-8地区で検出した遺構で、平面形は円形を呈し直径約55cm、深さ約25cmを測る土坑である。土坑内からは弥生時代中期の土器体部片とサヌカイトの石片494点が出土した。土器は詳細な時期は判らないが、近接する土坑の出土遺物から畿内第IV様式のもの^(注2)と想定したい。

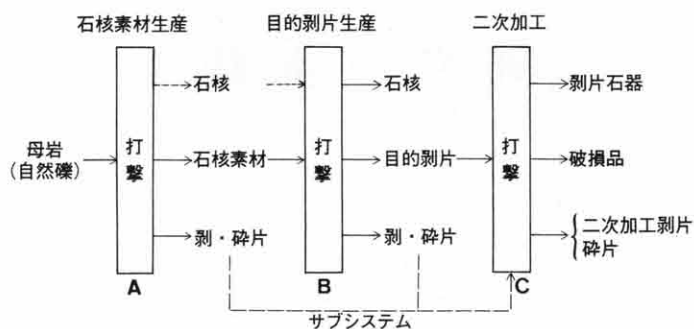
分析に用いた土坑は、遺構検出時から石器の存在が認められたことから、埋土をすべて持ち帰り3mmメッシュの篩^{ふるい}で石器の検出に努めた。石器の出土状態は廃棄単位が判る層を成すような状態ではなく、土器とともに散漫に出土することと、埋土の断面観察から1度に埋められたものと想定できる。

2. 剝片石器の操作概念

剝片石器を分析していく上で、操作概念を第2図のように考えていきたい。自然の石が剝片石器になるまでの段階



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 石器製作の操作概念

を3つの剥離工程に大別する。Aは自然に産出している原礫を分割し、石核の素材を作り出す工程である。この剥片には原礫面が残されることが多い。同時に石核素材を作り出した残核、石核に適さない剥片や不規則な割れによって生じた碎片が作り出される。また原

礫が小さい場合、この工程が省かれることもある。

Bは石核の素材から剥片石器の材料となる剥片を作り出す工程である。石器の素材となる剥片は通常目的剥片と呼ばれ、当該期の剥片石器を作成することのできる剥片を、組織的に剥離したものを指す。石核と、目的剥片とは異なる剥片や不規則な割れによって生じた碎片が副産される。A・B工程ともに碎片や石核ができるが、これらを利用して石器が作られることもある。特に石材産地から離れた遺跡では再利用の頻度が高いものと想定できる。

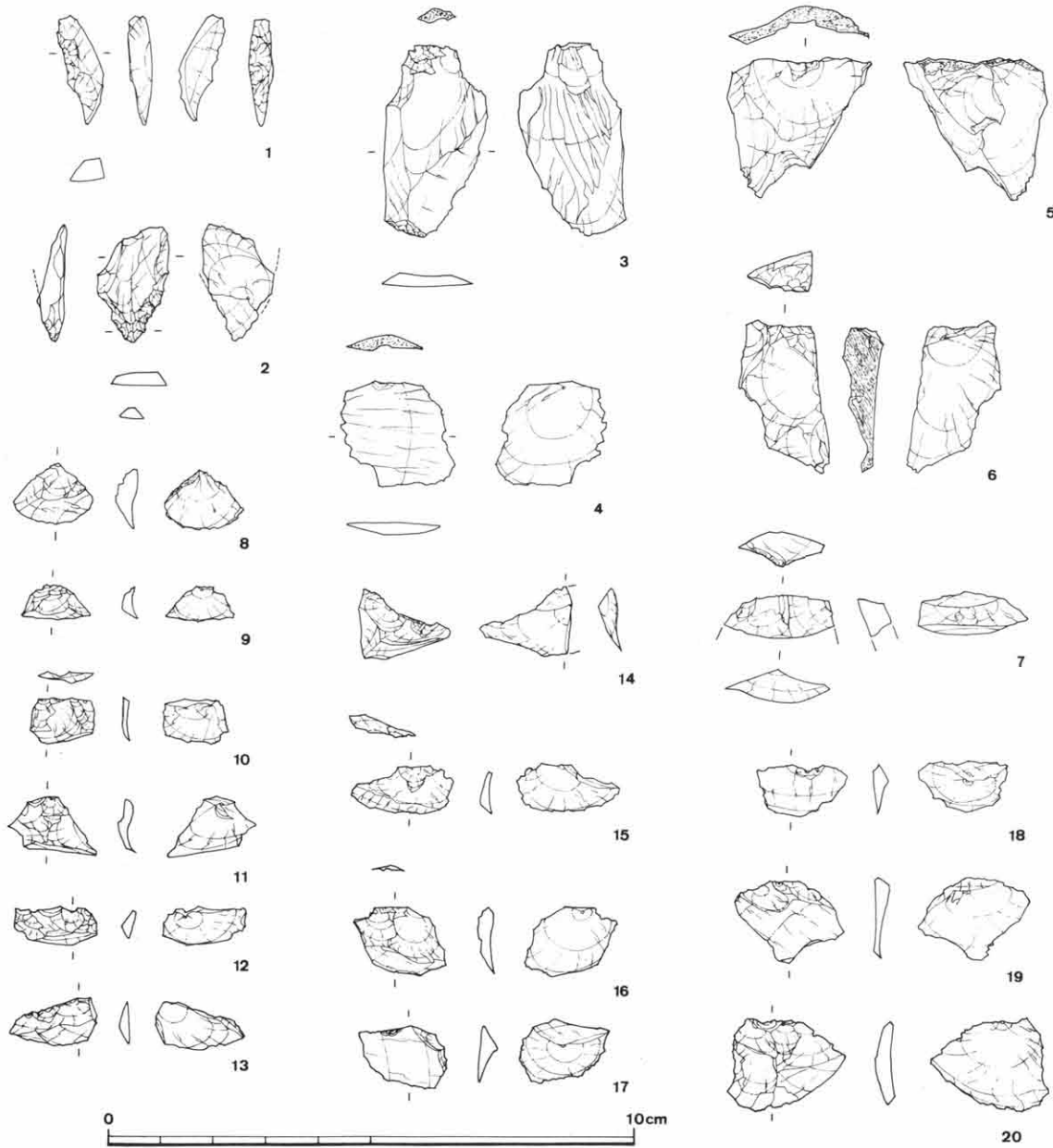
Cでは目的剥片を二次加工によって形状を整え、機能部位を作り出した剥片石器が作られる。この生産工程においては、剥片石器を製作する途中に生じた破損品と、二次加工によって生じた剥片(二次加工剥片^(注2))および碎片が生産される。二次加工の工程はさらにいくつかの段階を持つ可能性がある。粗い成形加工と精緻な整形および調整加工の工程である。剥片石器の中には成品と製作途中の未成品があると考えられるが、製作址において二次加工の剥離痕の数や大きさ、法量等の検討が必要であり、分類は恣意的^(注3)であることが多い。破損品は使用による破損と製作時の破損があるが、単体での分別は困難なことが多い。二次加工の程度や未加工部の存在はもとより、二次加工剥片の共伴等による場の機能の復原から分別が可能となる。

特定の剥片石器が複数の異なる技術を持つB工程からできた剥片が用いられたり、1種類のB工程で剥離された目的剥片が多くの器種に用いられたりする可能性もある。二次加工の技術だけではなく、石器製作のシステムを加味し、「かたち」学を超える研究戦略が必要とされている。

3. 出土資料分析

出土石片494点の全てがサヌカイト製で、肉眼的には二上山産と考えられる。石片の多くは2cm以下の剥片である。完成された石器は1点も出土していない。また、自然面(原礫面)を持つものは、8.1%(第4図(2))である。

石器組成(第4図(1))は、破損品2点、剥片441点、碎片51点である。第3図1・2は破損品と考えられるもので、いずれも剥片を素材としており、その主要剥離面と考えられる面からのみ二次加工が施されている。石器に認められる剥離痕の切り合いから破損面が最も新しい。素材剥片が分厚く、二次加工の角度があり、中央までおよんでいないことから錐の破損品とみなされる。使用の痕跡は肉眼では両石器ともに認められない。



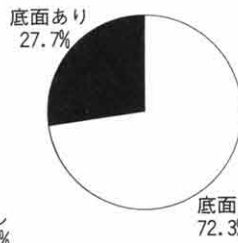
第3図 S K385613出土石器



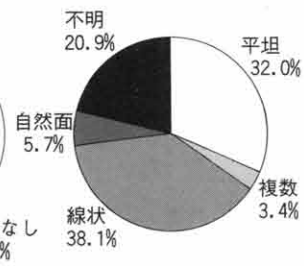
(1) 出土石器組成



(2) 自然面の有無



(3) 剥片の底面の有無



(4) 打面形状

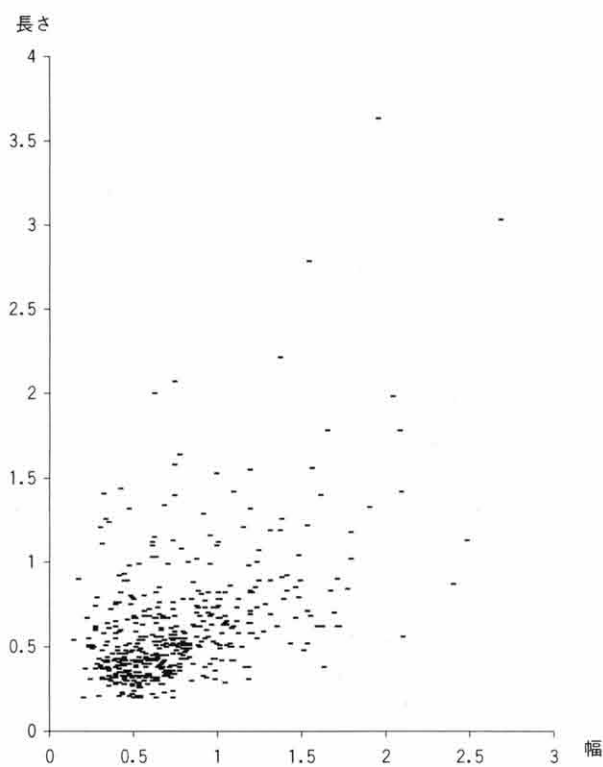
第4図 石器属性グラフ

剥片としたものは、打面や末端が欠損していても、主要剥離面と背面の区別が付くものを含めた。折れ面の存在するものは、剥片441点中の165点である。また、背面が全て自然面で占められた剥片は1点も出土していない。剥片の打面(第4図(4))は線状打面のものが最も多く、続いて1枚の剥離痕で構成される平坦打面のものが多い。打面調整の存在する可能性は低い。

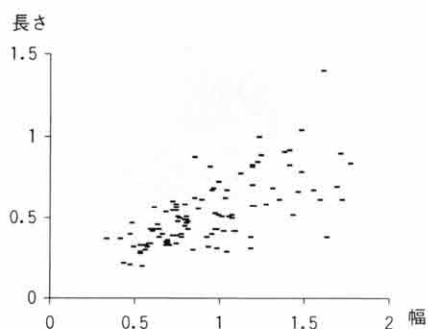
第5図(1)に見られるように、数点の法量が大きく突出した剥片が存在している。3～6がそれにあたる。全てが自然面を有しており、3～5は自然面を打面としている。小型のものは横長の割合が高いが、大型のものは縦長のものが多い。これらのことから小型の剥片とは異なった剥片剥離工程があったものと想定したい。7は大型の剥片の打面部側と考えられるが、末端部側が折り取られている。打面は1枚の剥離痕によって作られ、厚みを持つ。石核の打面が大きかった

ことがうかがえ、素材剥片の縁辺から作り出されたものとは考えられない。

8～20は横長の剥片で、全てが剥片素材の石核から剥がされている。背面側の末端に、打面となった石核の素材剥片の片面と相対する面と考えられる大きな剥離痕の一部を取り込んでいる(第5図参照)。この面を底面と呼び、これらの剥片を底面付き剥片とする。底面付き剥片は全剥片中27.7%(第4図(3))も存在している。これらの剥片には背面側に、主要剥離面と同じ打面から剥がされた剥離痕が通常複数認められ、剥片の縁辺から連続的に剥離されていることが判る。第5図で模式化すると、Iは剥片の縁辺から剥離される素材剥片の面と主要剥離面によって構成され断面が3角形になる剥片、IIは素材剥片が持っていた面である打面と底面、前に剥片が剥がされたネガティブな面と主要剥離面によって構成される。打面が線状打面になったり、剥片の剥離が打面に相対する面にまで到達せず底面ができないことを除く。17・18はIと同じではないが、石核素材剥片の縁辺をその背面に持っており、表裏のなす角度を復元することができる。出土量の



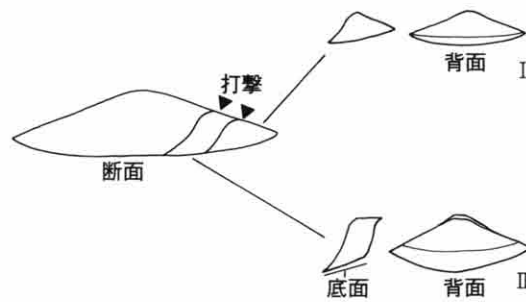
(1)全石片長幅関係グラフ



(2)完存底面付き剥片長幅関係グラフ

第5図 長幅関係グラフ

多いⅡも底面と打面の関係から同様に角度の復元が理論的には可能であるが、残存している部分が小さく困難であった。底面付き剥片の一部に自然面を持つものは、138点中6点、その中でも自然面を打面とするものは3点であった。



第6図 二次加工で生じる剥片概念図

底面付き剥片は剥片の縁辺の部分を連続的に剝離したものであり、それ自体が目的剥片

と考えられる法量を持たない。よってこれらは剥片石器の二次加工剥片と考えられる。

底面付き剥片以外の剥片は、大型のものを除くと横長のものが多く長さ1cm、幅1.5cm以下のものがほとんどである。これら多くの剥片もまた二次加工剥片であったことが想定できる。

碎片は主要剝離面が特定できなかつたり、不規則な割れによって生じたと考えられるものを指し、石器組成中10.3%を占めている。碎片は小型のものが多く底面付き剥片の法量を越えるものはほとんどない。多くが二次加工時にできたものと考えられる。第5図のグラフ1中には、碎片の最も長い部分を長さ、それに直交する最も法量のある部分を幅としてグラフ上に落とした。このため幅に対して長さのまさる石器として51点が見かけ落とされている。

4. 小 結

土坑S K385613出土石器群は、大形の剥片、二次加工剥片、石錐の破損品によって構成されていることが判る。この土坑の出土石器を見る限りA工程は認められない。大型の剥片はあるが少なく、その工程の副産物と考えられる石核や大型の碎片などはなく、B工程も認められない。二次加工のC工程だけが認められる。大型の剥片は目的剥片と考えられるが、6を除くと厚さがなく、3・5は剥片が背面に残された打瘤の歪み等で石錐の素材にはならない。6は剥片の片側辺に分厚く自然面が残り背面あるいは主要剝離面から二次加工するどちらの場合でも打撃角が90°に近くなる。これもまた素材剥片に適さない。

底面付き剥片が1/4存在するのは、二次加工の内でも素材剥片の幅や長さを減じる整形加工が多く行われたことを物語っている。剥片の中には背面の一部に、剥片が剝がされた側辺と対する辺の二次加工面が付着していることもある。

土坑の遺物は1回の作業として二次加工だけが行われたことを示しており、対象物は石錐である。素材剥片を剝離する工程は別の機会に既に行われており、選別を受けた素材剥片によってC工程が行われた。同時に選ばれた目的剥片の内、石錐に製作に向かないものが廃棄されたと考えられる。このように石器製作においてB工程とC工程が独立して行われており、1器種のみを集中して生産している可能性が指摘できる。しかし、他の集落に供給するような専門的な規模でないのは出土量の示す通りである。

土坑の性格は、2つの場合が想定できる。1つは石片が飛び散らないように穴の上でC工程が

行われた、あるいは別の場所でC工程が行われ廃棄された場合である。石片は底部に集中して検出していないことから、前者の可能性は低い。微少な剥片の存在から石片を回収するため敷物を敷いて集め、他のゴミと一緒に土坑に捨てられたと想定したい。

分析した資料は500点弱と少なく分析に手頃であったが、土坑内の遺物は時間の比較的限られた良好な資料であり、その詳細な検証によって遺跡内生産^(注5)(ドメスティック・プロダクション)の実態を明らかにする可能性がある。ドメスティック・プロダクションの中でどの工程が行われているのかについての実証的な研究の積み重ねが、遺跡の機能や石器の流通について多くのことを物語ってくれる。石器・石材の流通をモデル化する研究にも一定の節度が必要であり^(注6)、同時に反証可能性^(注7)(Falsifiability)を成立させる資料提示と、解釈の道筋と前提条件を明らかにすることが重要である。

(なかがわ・かずや=当センター調査第2課調査第4係調査員)

注1 岩松 保・野島 永「名神高速道路関係遺跡平成8年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第78冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997、1~48頁

注2 通常ブランディングチップと呼ばれるが、ブランディングは刃潰し加工であり、整形加工を含まない。またチップと言う概念は個人の法量に対する思いによって大きく異なり、大きさの区別にはほとんどの場合根拠がない。これらのことから二次加工剥片と名じた。

注3 石鏃などでは、時には石鏃未製品や粗製尖頭器と呼ばれるものがあり、その分類が何に基づくか、出土遺物内で検証されたことはほとんどない。

注4 森本 晋「ごみの捨て方—石器製作と廃棄 弥生時代河内の事例—」(『考古学研究』第38巻第3号) 1991 67~75頁

*残念ながら森本氏の用いた土坑資料は多くが、調査者によって資料化されておらず詳細な研究を阻害している。森本氏が資料の重要性をいち早く喚起したものと考えられる。

注5 Domestic production。石器の終焉の問題についても、石斧や石庖丁等に認められるであろう流通物としての石器の消滅と石材消費地にある遺跡のドメスティック・プロダクションの消滅の2つの観点からの研究が必要である。

注6 「理解するとはすなわち解釈することである。……解釈とは(たいていの人が思いこんでいるように)絶対的価値をもったものではない、つまり時間を越えた領域において発揮される精神の運動ではない……」 S.ソントク(高橋康也ほか訳)『反解釈』 竹内書店新社AL選書 1971、17頁

注7 関 雅美『ポパーの科学論と社会論』 頸草書房 1990

*『雲宮遺跡』のまとめで述べたように弥生時代の遺物は資料提示がないまま、一定のコンセンサスが形成されている。また、資料批判なしに石器組成論が論じられていることから、石器研究の戦略を変更する必然性を示した。既にいく人かで試みられているが、反証可能性(Falsifiability)の確立、技術形態学的思考、場の機能・作業工程復原の視点の導入を提唱したい。

参考文献

河野一隆「理論考古学の節度」(『京都府埋蔵文化財情報』第59号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996、23~28頁

赤澤 威・小田静夫・山中一郎『日本の旧石器』 立風書房 1980

塚田良道「弥生時代における二上山サヌカイトの獲得と石器生産」(『古代学研究』第122号) 1990、1~26頁

中川和哉・田畑直彦「雲宮遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

浦入遺跡群A地点の発掘調査

筒井 崇史

1. はじめに

浦入遺跡群は、京都府舞鶴市千歳池カナルほかに所在する。同遺跡群の発掘調査は、舞鶴市北郊の大浦半島の先端に位置する浦入湾に、関西電力株式会社によって火力発電所の建設が計画されたことにともない、舞鶴市教育委員会の依頼を受けて実施したものである。

発掘調査は、舞鶴市教育委員会と当調査研究センターが平成7年度から実施しており、これまでに、飛鳥時代から奈良時代にかけての集落跡(浦入遺跡群N地点、当調査研究センター調査)や、平安時代の大規模な製塩遺構(浦入遺跡群Q地点、舞鶴市教育委員会調査)、竪穴系横口式石室を内部主体とする円墳(浦入西2号墳、当調査研究センター調査)などの調査が行われている。このほかにも、遺構密度は希薄なもの、縄文時代前期～後期にかけての遺物が多数出土している(浦入遺跡群P地点、舞鶴市教育委員会調査)。また、注目すべき遺物として「笠百私印」と押印された製塩土器支脚が浦入遺跡群Q地点で出土している。縄文土器では、縄文時代早期末にまで遡る土器片が浦入遺跡群N地点で確認されている^(注1)。

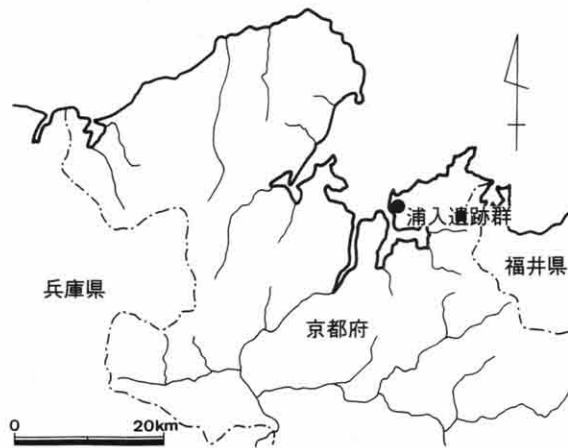
平成9年度に、当調査研究センターでは、浦入遺跡群A地点(約7,200m²)・O地点(約5,000m²)・R地点(約700m²)の調査を実施した(第2図)。今回は、平成9年度上半期に調査の終了したA地点の調査成果について概略を報告する。

なお、A地点の調査は、平成9年4月14日から同11月20日にかけて実施し、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美、同調査員田代 弘・筒井崇史が担当した。

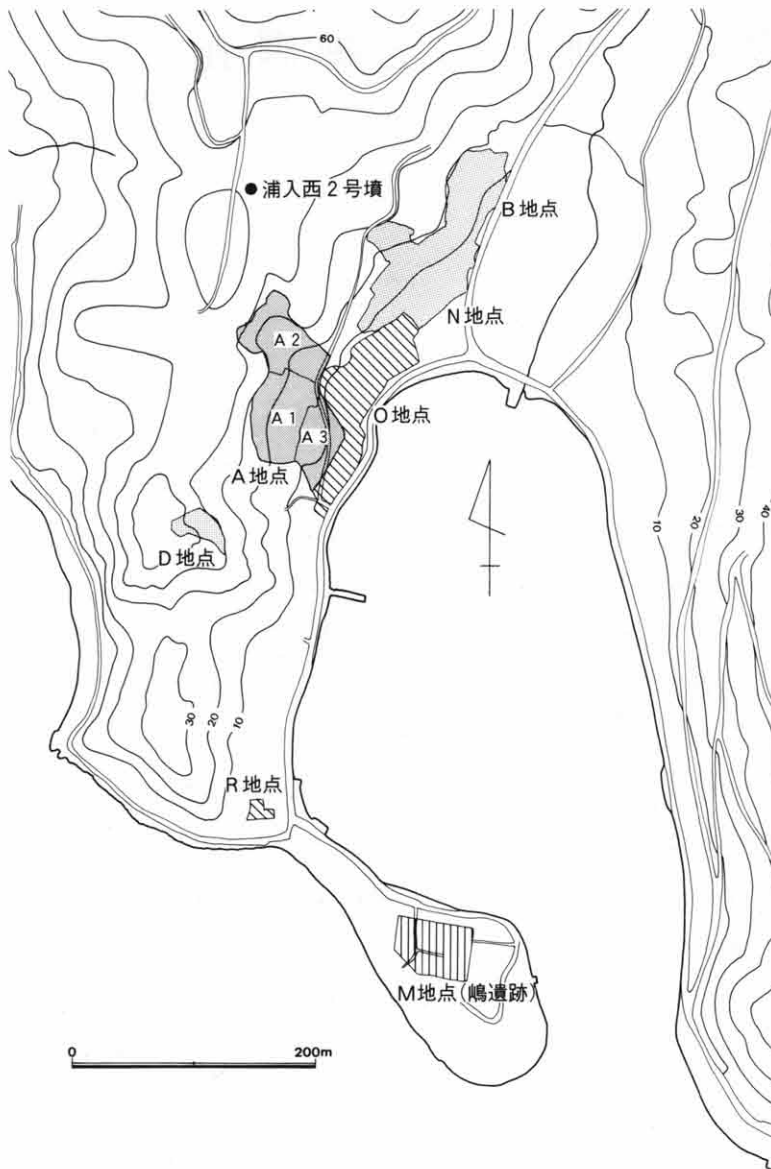
2. 調査の概要

浦入遺跡群A地点は、浦入湾の西側、標高4～25mの丘陵斜面に位置する。調査の関係上、A地点は、A1～A3区の3つの調査区に分けて調査を行った。

①A1区(第3図) 今回、調査を行ったA地点の中でも、中心的な遺構が多数検出された。A1区では、丘陵斜面を深く掘り込んだ竪穴式住居跡1基^(注2)や、同様に丘陵斜面を掘り込んで平坦面を造成したテラス状遺構6基^(注3)、



第1図 調査地位置図



第2図 浦入遺跡群調査地点配置図(当調査研究センター分)

掘立柱建物跡1棟・柵跡または掘立柱建物跡と思われる柱穴200基あまり・土坑1基などを確認した。以下、主要な遺構について報告する。

竪穴式住居跡(第4図)調査地内では、もっとも高い位置に造られている。竪穴式住居跡は、長辺8.7m・短辺5.3mを測り、床面上で柱穴や土坑、周壁溝などを確認した。住居跡内部に残した土層観察用のセクションを観察すると、丘陵上位側の周壁に沿って黒い腐植土がまっすぐ立ち上がっているのを確認した。竪穴式住居跡の周壁がほぼ垂直であることと合わせて、住居跡の内側に板などを当てて壁としていたものと思われる。^(注4)

住居跡の北隅には、住居跡内部に煙道を有するカマド

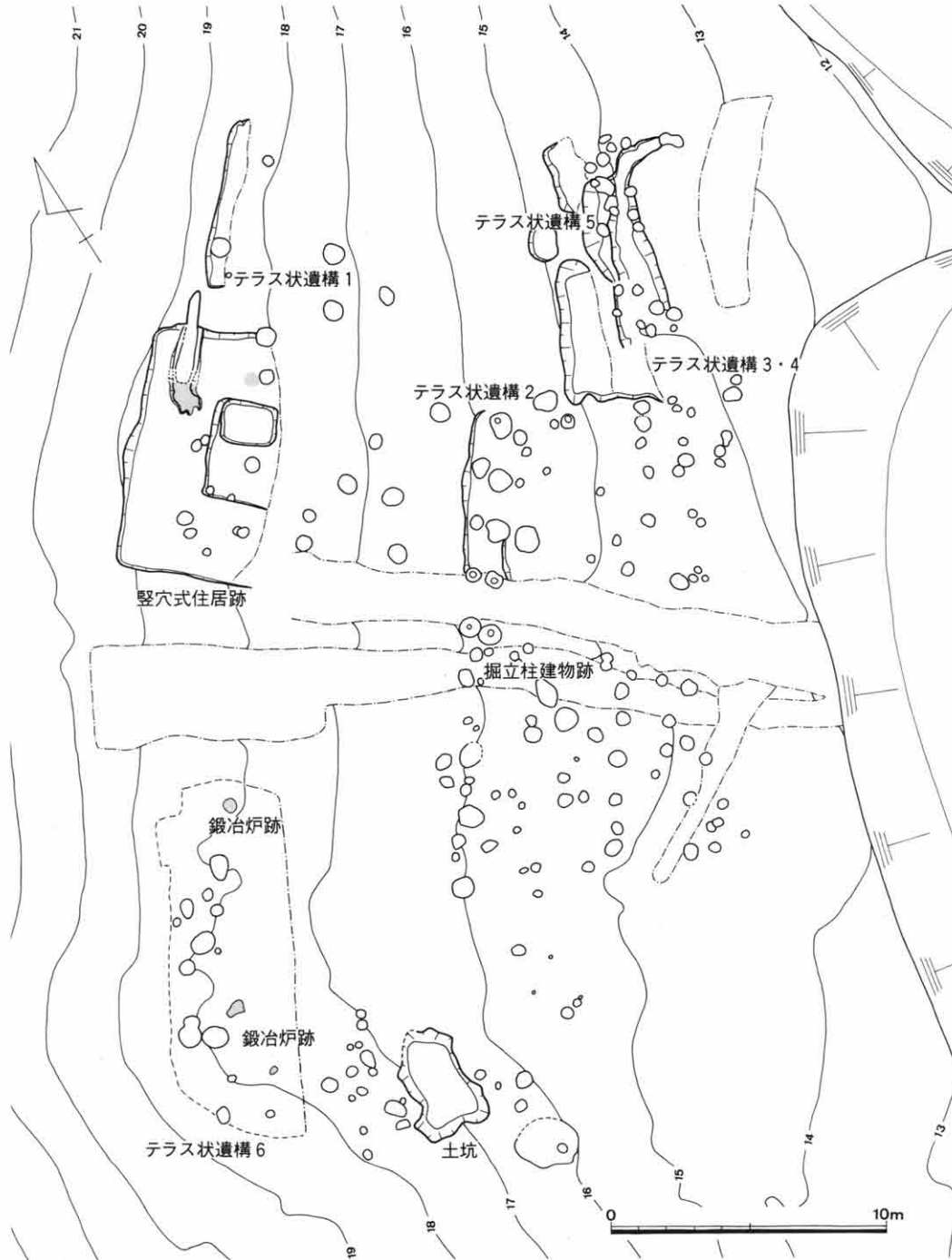
が造り付けられていた。このような構造を有するカマドについては、平成8年度に調査を実施した浦入遺跡群N地点の竪穴式住居跡S H01にも見られた。^(注5)今回、検出されたカマドは、これまでの検出例よりも規模が大きく、時期も後述するように若干新しく位置づけられる。

出土遺物には、土師器・須恵器・製塩土器支脚などがある(第6図1~3・5~7・14)。6は、口径17.7cm・器高5.3cmを測る杯Lである。底部に「政」と墨書されている。5は、杯L蓋である。口径17.6cm・器高3.4cmを測る。杯Lは、6・7のほかにも別個体と思われる破片が多数出土している。14は、長さ13.4cm・直径5.5cm程の棒状を呈する製塩土器支脚である。製塩土器支脚としては、もっとも古いものの1つと考えられる。また、須恵器杯・杯蓋、土師器甕などの日用雑器や、製塩土器片も出土している。

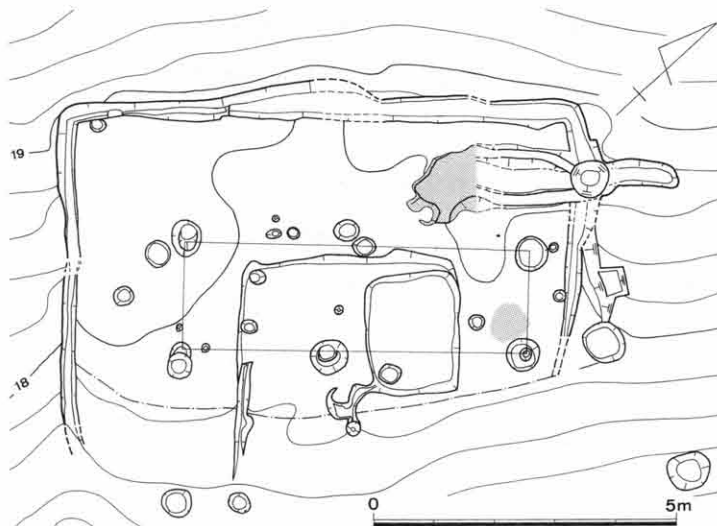
出土遺物から竪穴式住居跡は、奈良時代前半に営まれたものと考えられる。

テラス状遺構 3・4 2基以上のテラス状遺構が重複していると考えられるが、北東側に舞鶴市教育委員会の試掘トレンチがあるため、全容は不明である。床面で柱穴が確認できたが、建物跡としてはまとまらない。

出土遺物としては、テラス状遺構 3の埋土から多数の製塩土器片が出土した。また、「与□」と墨書された須恵器杯B(第6図10)も出土している。このほかにも内面にかえりを有する杯B蓋の破片なども出土している。これらの遺物からテラス状遺構 3については、奈良時代前半頃に営まれたものと考えられる。



第3図 A1区遺構配置図



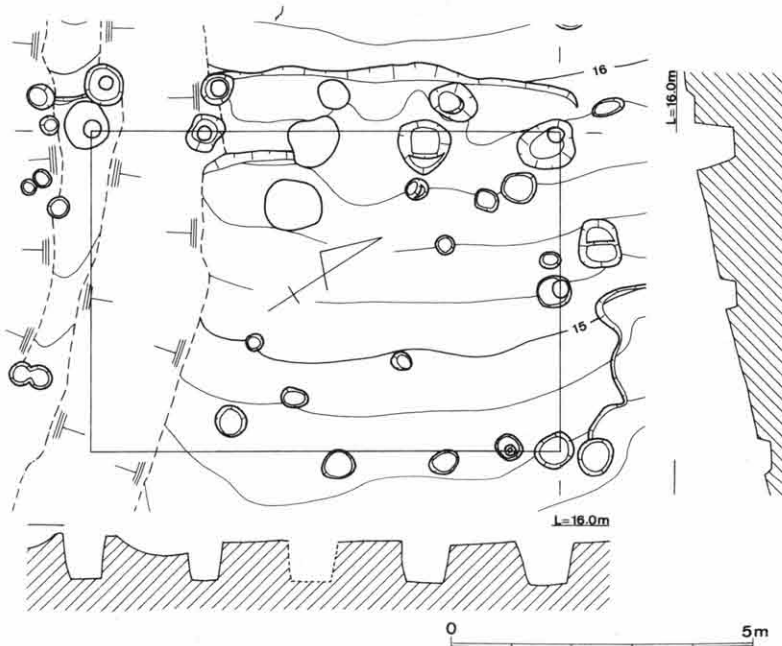
第4図 竪穴式住居跡実測図

テラス状遺構6 竪穴式住居跡の南西側に造られた、大型のテラス状遺構である。遺構の一部は、すでに舞鶴市教育委員会の試掘調査で確認されていた。土石流によって遺構が破壊されているため正確な規模は不明であるが、検出した床面は長さ12.8m・幅4.0m以上を測る。床面上において、多数の柱穴あるいは土坑を検出したほか、鍛冶炉と思われる焼土の痕跡を確認した。鍛冶炉跡は、試掘調査

と合わせて3基確認した。

テラス状遺構6からは、フィゴの羽口片や須恵器・土師器などが出土し、竪穴式住居跡同様、奈良時代前半頃の遺構と考えられる。また、床面に掘られた土坑から鉄滓も出土している。

掘立柱建物跡(第5図) 竪穴式住居跡の南東側に位置し、N-33°-Eに主軸をとる4間(7.8m)×2間(5.3m)の掘立柱建物跡である。桁行きの柱穴は、一辺が55~95cmを測る方形または長方形を呈し、深さは70cm前後を測る。確認できた柱痕跡は直径20cmないし30cmを測る。梁間の柱穴は、北東側で2個確認できた。なお、掘立柱建物跡で確認できた柱穴は以上の7個だけであるが、これは遺構が斜面地に立地するため、ほかの柱穴についてはすでに流失あるいは削平されてしまったものと考えられる。



第5図 掘立柱建物跡実測図

遺物は、柱穴内から土師器片・須恵器片が出土している。これらの小片から掘立柱建物跡の時期を確定することは難しいが、おおむね奈良時代前半頃と思われる。

土坑1 遺構が集中していた平坦地の南端で検出した土坑である。長軸長4.2m・短軸長2.0mを測り、ややいびつな形状を呈する。土坑内からは須恵器杯A・杯B・杯B

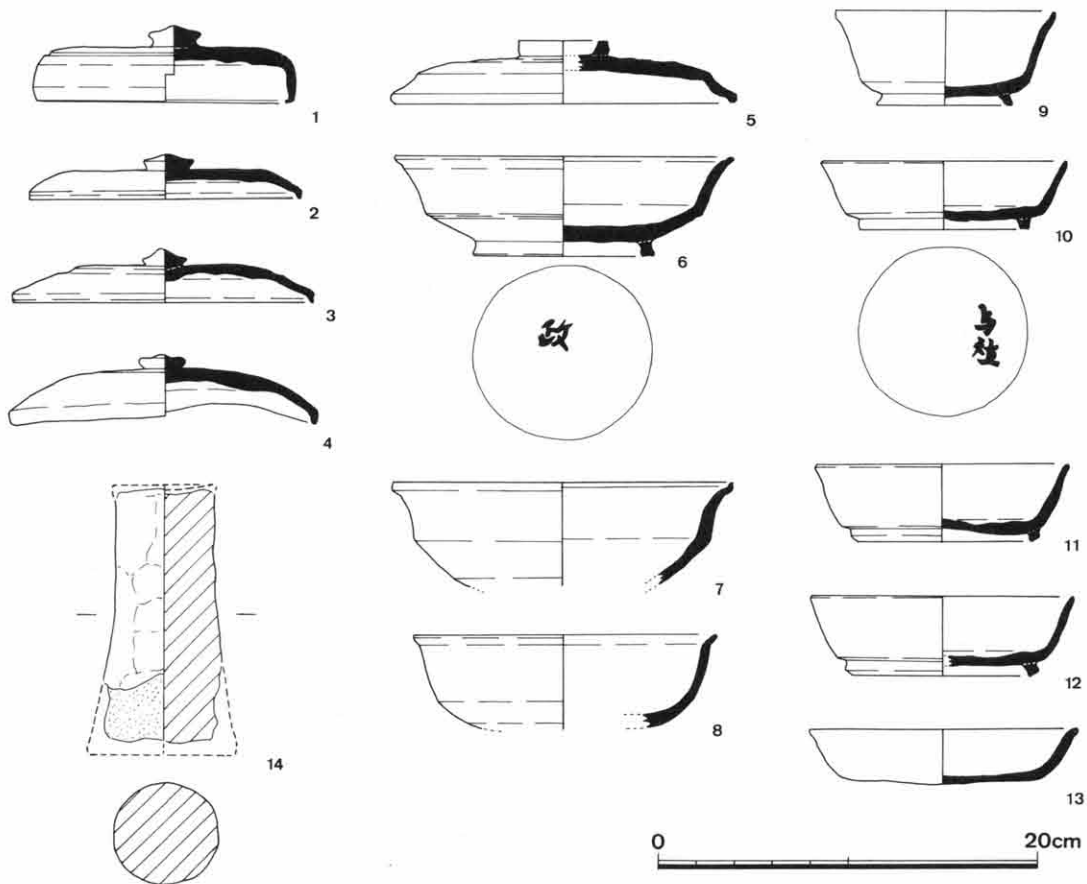
蓋、土師器杯・甕などがまとまって出土した(第6図4・11~13)。出土した遺物から、ほかの遺構同様、奈良時代前半頃と思われる。

②A2区 A1区の北側に位置する谷部に設けた調査区である。調査の結果、柱穴や土坑を検出したが、建物跡として復原できるようなものは確認できなかった。調査以前に、畑地あるいは果樹園として利用されていたため、遺構の多くが削平されたようである。

柱穴や土坑からは、須恵器杯B・杯F、土師器片、石錘などが出土した。これらは、おおむね、A1区で出土した遺物同様、奈良時代前半頃に位置づけられる。

③A3区 A1区の東側、より海岸に近い丘陵斜面の調査区である。当初、遺構の存在を予想していなかったが、調査の結果、多数の柱穴や土坑を確認した。柱穴や土坑からは、多数の遺物(須恵器杯A・杯B・杯B蓋、土師器杯・甕、製塩土器支脚など)が出土し、おおむね奈良時代前半頃に位置づけられる。

ところで、A3区で検出された遺構の多くは、掘形が極めていびつで、遺構がつぶれたような様相を示していた。その原因については現在検討中であるが、重機による断ち割りと、下方に位置するO地点の調査成果から、A3区で検出された遺構のベースとなった黄褐色土の崩落もしく



第6図 出土遺物実測図

- | | |
|--------------------|------------|
| 1~3・5~7・14. 竪穴式住居跡 | 1~12. 須恵器 |
| 9・10. テラス状遺構 | 13. 土師器 |
| 4・11~13. 土坑 | 14. 製塩土器支脚 |
| 8. A1区包含層 | |

は崩壊が直接的な原因と考えられる。遺構のベースである黄褐色土の崩落が発生した時期やその要因については、今後の検討課題である。

3. まとめ

以上が、平成9年度に行った浦入遺跡群A地点の調査の概要である。

浦入遺跡では多数の調査地点があり、多くの成果が得られている。これらの調査成果をふまえてA地点の成果について簡単にまとめると以下の2点に要約できる。

①A1区では、竪穴式住居跡・テラス状遺構・掘立柱建物跡など、奈良時代前半頃の遺構を多数検出した。これらは平成8年度におけるN地点の調査で検出した飛鳥時代の遺構群と奈良時代中頃から後半にかけての遺構群との間に位置づけられるものと考えられる。

②浦入遺跡における製塩活動は、舞鶴市教育委員会の調査によって、奈良時代前半には開始されていたことが明らかになりつつある(Q地点)。一方、今回、調査を行ったA1区の竪穴式住居跡からは、奈良時代前半の須恵器とともに製塩土器やその支脚が出土しており、丘陵部の遺構群(A地点)と海浜部の製塩遺構(Q地点)とが関連することが明らかになった。このことから、奈良時代の丘陵部の遺構は、製塩関連工房を含む工人達の居住域と位置づけることができる。

(つつい・たかふみ=当センター調査第2課調査第2係調査員)

注1 これまでに報告されている浦入遺跡群に関する文献は以下の通りである。

- ①田代 弘「嶋遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第59号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- ②田代 弘「舞鶴発電所関係遺跡(嶋遺跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第73冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- ③奈良康正「浦入西古墳群」(『京都府埋蔵文化財情報』第61号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- ④筒井崇史「浦入遺跡N地区」(『京都府埋蔵文化財情報』第63号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- ⑤増田孝彦「浦入西2号墳」(『京都府埋蔵文化財情報』第63号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- ⑥筒井崇史・榎本順子「竪穴式住居内に煙道を有するカマドについて -浦入遺跡における調査事例から-」(『京都府埋蔵文化財情報』第65号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- ⑦吉岡博之「丹後の土器製塩-舞鶴市浦入遺跡発掘調査成果から-」(『シンポジウム 製塩土器の諸問題 -古代における塩の生産と流通-』 塩の会) 1997
- ⑧吉岡博之「舞鶴市浦入遺跡(律令期製塩遺跡)」(『第5回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集』 京都府埋蔵文化財研究会) 1997
- ⑨増田孝彦・筒井崇史「浦入遺跡群平成8年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第80冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

注2 丘陵斜面の上位側を掘削し、下位側に盛り土を行ってテラス面を造り出すもののうち、丘陵斜面の傾斜方向に側壁を有するものを指す。上部構造は失われているため明らかではないが、テラス面全

体に覆い屋(屋根)がかけられていたと考える。

- 注3 竪穴式住居跡同様、丘陵斜面の上位側を掘削し、下位側に盛り土を行ってテラス面を造り出すもののうち、丘陵斜面の傾斜方向に明瞭な側壁を持たないものを指す。この種のテラス面は、その内部に掘立柱建物を建てるために造成されることが多いようである。ただし、テラス状遺構に必ず掘立柱建物が建てられるというわけではない。
- 注4 いわゆる大壁造りと呼ばれるものではなく、単に住居の内部に板を建てただけの簡単な構造のものとする。
- 注5 注1文献⑥参照。



浦入遺跡群A地点遠景

長岡京造営に伴う河川改修事業

小池 寛

1. はじめに

1996年に刊行された『自然環境と文化』^(注1)は、第四紀を中心とする地球規模の寒冷・温暖気候をはじめ様々な自然環境が、文化形成に及ぼした影響について多角的に検討を加えた概説書である。その巻頭図版には、概説を記述する上で特に重要な事例が解説されている。本稿で取り上げる京都府向日市で検出した護岸施設の杭列S X 36675についても、巻頭図版第15頁にモノクロ写真1枚とともに、135字からなる解説が添えられている。また、総論11頁目の末尾64字においても当該遺構に対する総論執筆者の見解が提示されている。

杭列S X 36675についての客観的な事実報告は、既に概要報告書^(注2)によって公表しているが、概説書では、遺跡名称・用材の樹種同定・遺構の解釈等において明らかな事実誤認が見受けられる。また、一般的な概説書であることから、発掘調査成果とは異なった評価が、ひとり歩きする危険性が危惧される場所である。ここでは、以上の経過を踏まえ、発掘調査によって判明した事実の確認と概要報告書では、あまりふれることができなかった遺構についての私見を提示することを目的としている。

2. 『自然環境と文化』における当該遺構の解説と問題点の指摘

『自然環境と文化』の巻頭図版第15頁には、遺構全景を東方向から撮影したほぼ1頁大のモノクロ写真が掲載されている。また、写真下段には、「京都府向日市池ノ尻遺跡の護岸工事跡 8世紀」のキャプションとともに以下の解説が掲載されている。

「池ノ尻遺跡では、大がかりな護岸用の土木工事跡がみつかった。800本ほどのヒノキ材を使った杭列が、およそ75mにわたって検出された。おそらく小河川から水田に水を引く用水路の護岸用と推定される。また、水の祭祀に使われたと思われるヒノキ製の人形や、墨書土器なども出土した。」

以上に引用した解説文中、下線で示した部分に後述するような事実誤認が認められる。また、概説書の総論11頁目にも、当該遺構に関する見解が提示されている。以下に引用しておく。

「京都府向日市の池ノ尻遺跡における、長さ約75mにわたって検出された杭列は、水田に水を供給する用水路の大規模な護岸工事跡といわれる。」

以上が、杭列S X 36675に関する解説文の全文である。当該遺構に関する詳細な事実関係については後述することとし、遺跡名称について確認しておきたい。

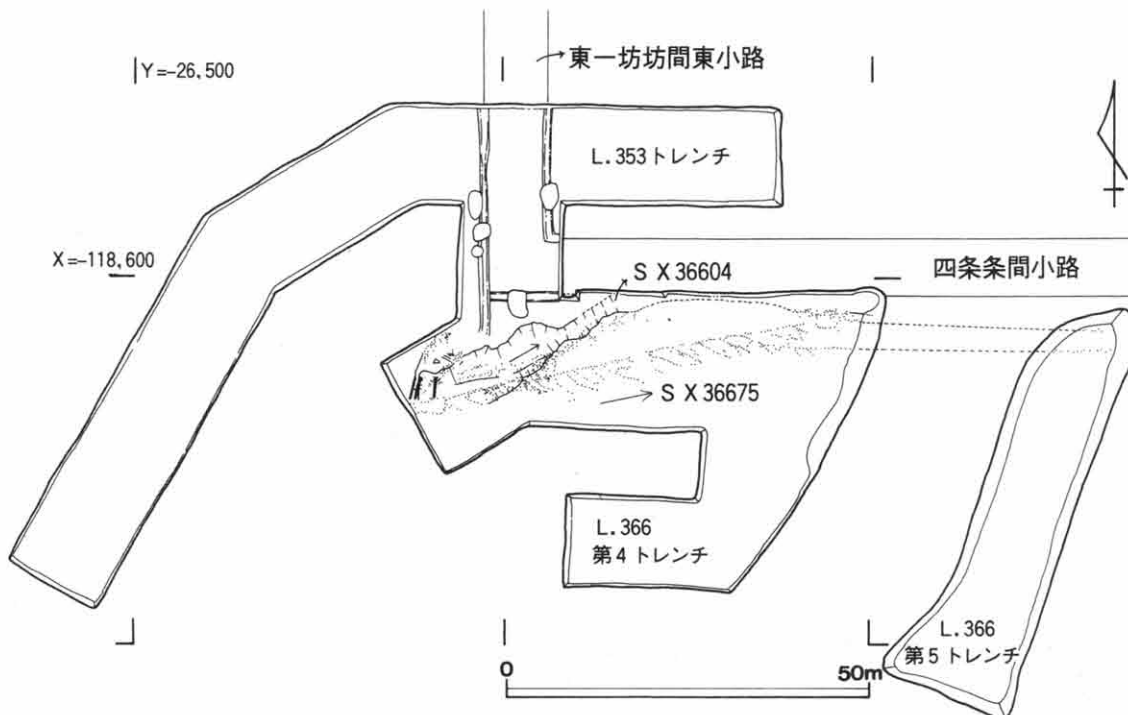
当該遺構を検出した遺跡は、京都府向日市上植野町池ノ尻・大門に所在しており、調査地は、長岡京跡左京四条一坊十町・十一町・十四町・十五町の推定地に該当する。また、本調査地で検出した長岡京廃都後から鎌倉・室町時代に到る遺構群は、隣接する地点に遺跡の中心地が設定されている中福知遺跡の範疇で捉えている。一方、当該地の発掘調査は3ヶ年に及んでおり、ここで報告する杭列S X 36675を検出した調査次数は、平成7年度に実施した長岡京跡左京第366次調査である。

以上のことから、概説書に記されている池ノ尻遺跡という遺跡名は、京都府教育委員会及び向日市教育委員会が刊行している遺跡地図には存在しておらず、長岡京跡左京第366次調査あるいは中福知遺跡と呼称することが適切であろう。

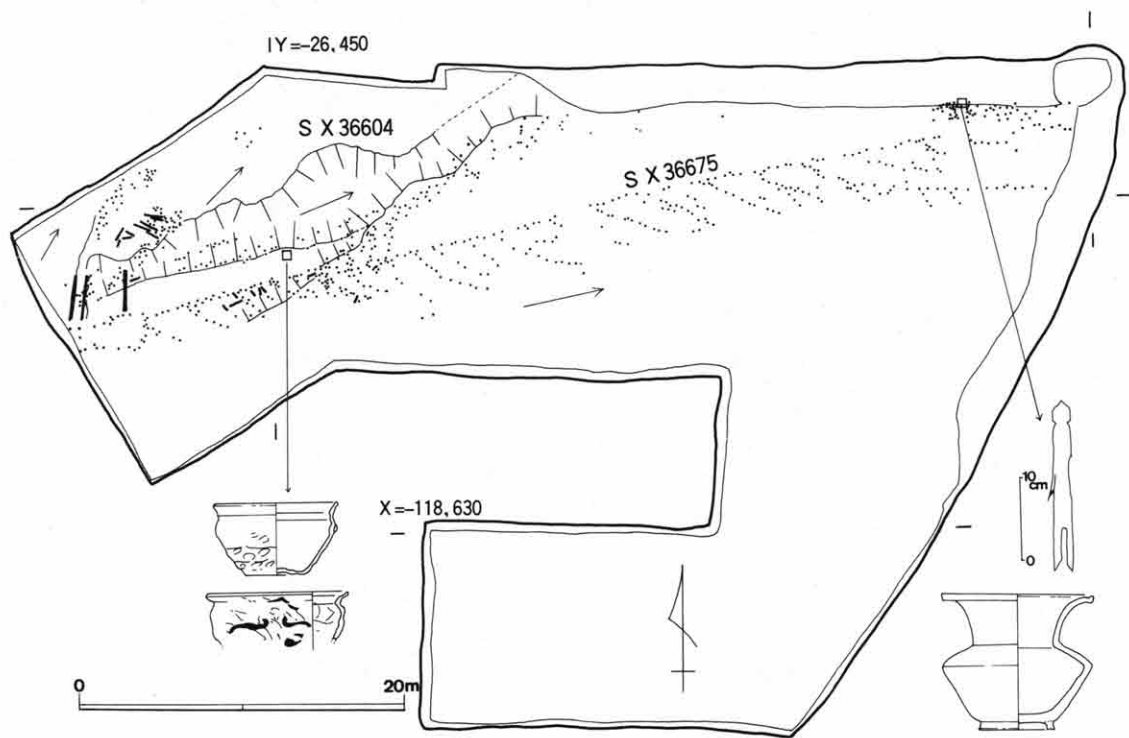
3. 流路S X 36604と条坊施工のための整地層との前後関係について

本稿で取り上げる護岸施設の杭列S X 36675は、直線的な杭列から多数の枝状杭列によって構成されているが、当該遺構より先行する流路S X 36604との関連、そして、四条条間小路及び東一坊坊間東小路施工のための整地層との関連が重要であることから、まず両者との関連を概観した後、杭列S X 36675について説明をすすめていきたい(第1・2図)。

流路S X 36604 北から東に約57°の方向に主軸をもち、トレンチ北端でほぼ北方に屈曲する流路である。トレンチ北壁に接近して流路南肩が位置するため、北方へ屈曲した段階の形状・規模などは不明である。しかし、トレンチ最北東端において、乱雑に打ち込まれた流路の護岸用の杭群を検出できたため、同一の遺構であることが把握できた。流路の幅は、最も広い部分で7m、最も狭い部分で1.8mを測る。



第1図 検出遺構位置関係図



第2図 流路S X 36604・杭列S X 36675実測図

流路S X 36604を検出した基盤層は、灰褐色砂利層であり、流路自体の埋土もやや大きめの礫が主体となっている。流路の南東肩部は、丸杭を乱雑に打ち込んで形成しており、北西肩部の南西端でも同じように丸杭を乱雑に打ち込んで形成している。特に、北西肩部の南西端では、3本の丸太材を流路の主軸に概ね直交するように並置しており、堰状施設の存在を示唆している。第1・2図に図示した流路S X 36604の北西肩部の輪郭は、杭を打ち込んでいないものの、平面的に堆積土が変化する界線によって復原している。また、その復原線より北西方において僅かながら杭群を検出していることから、復原した北西肩部は、ある時期の流路の輪郭に過ぎず、流路形成時には、現位置よりも北西方向に肩部が位置したと想定できる。

流路の北東端の杭群中から、須恵器の壺Qと人形が出土しており、これらは明らかに流路S X 36604に伴う遺物と確認できた。なお、後述する護岸施設の杭列S X 36675との交差部分から出土した土師器の墨描鬼面土器などを概要報告では杭列S X 36675出土とした。^(注3)が、本稿作成のために原図で出土レベルなどを検討した結果、流路S X 36604に伴う可能性が極めて高いことが確認できた。本稿でこれらの遺物の検出遺構について訂正しておきたい。

条坊施工のための整地層 調査地は、長岡京跡左京四条一坊十町・十一町・十四町・十五町の推定地にあたり、四条条間小路と東一坊坊間東小路の交差点を左京第353次調査トレンチと第4トレンチ間で検出している。東一坊坊間東小路の東側溝は、四条条間小路の北側溝と接続し東流しており、四条条間小路の路面には穿たれていないことが確認できた。一方、東一坊坊間東小路の西側溝は、四条条間小路の南側溝を切り込んで南流していることが、平面・断面観察から確認できた。これは、交差点以北に平安時代前期の掘立柱建物跡を確認していることから、生活排水

及び雨水を左京第353次調査で検出した池沼(S X 35306)に流し込むために改修された可能性があり、これを傍証するかのよう^(注4)に池沼(S X 35306)から寄生虫卵が検出されている。なお、四条条間小路の両側溝は、東一坊坊間東小路の西側溝以西には掘られていないが、西方の池沼(S X 35306)の存在がその要因であろう。

以上のように、流路S X 36604及び杭列S X 36675の北隣接地点で条坊の交差点を確認することができたが、さらに、第4トレンチ北壁のY=-26,440m地点での土層断面(第3図)によって検証しておきたい。

基本的な堆積状況は、1mの造成土・旧耕作土下に鎌倉・室町時代の遺物包含層が0.3m程度堆積し、その遺物包含層下に長岡京期の須恵器・土師器を比較的多く含む遺物包含層が堆積している。この層は、非常に堅緻であることから、四条条間小路を施工する段階の整地層である可能性が高い。なお、北壁にほぼ沿って四条条間小路の南側溝が検出される想定をしていたが、平面的には検出できなかった。あるいは、この整地層の一部が南側溝の一部であった可能性も考えられる。

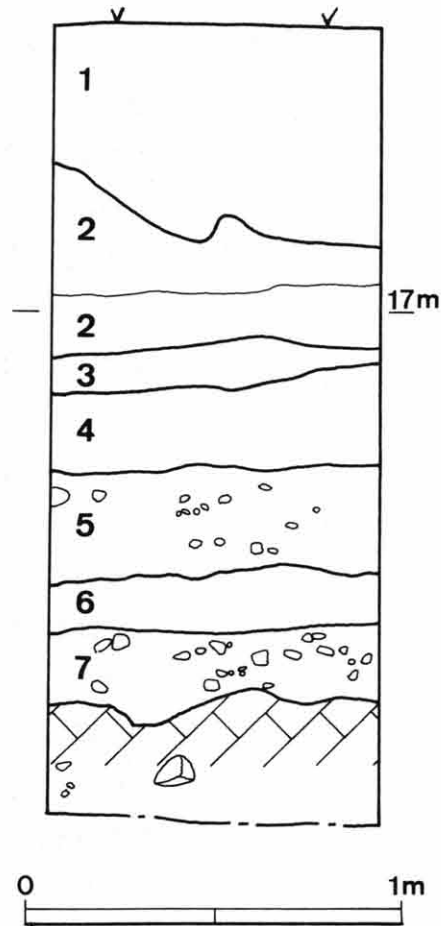
この整地層下には、暗茶褐色土層を確認しているが、遺物は包含していないものの、護岸施設の杭列S X 36675の上位に構築された堤状の盛り土の一部の可能性も視野に入れておきたい。また、その下層には流路S X 36604の埋土を確認した。

以上のように、流路S X 36604は、位置関係から四条条間小路直下を東流していたことが確認できており、その不安定な流路を少なくとも2回にわたって異質な土壌によって整地していることが確認できた。加えて、第4トレンチ北東端で出土した須恵器の壺Qから、奈良時代後期に到るまでは流水していたことが判明しており、条坊施工の条件整備のための施設こそが、護岸施設の杭列S X 36675と考えておきたい。

では、次に、護岸施設の杭列S X 36675について詳細に検討を加えることにしたい。

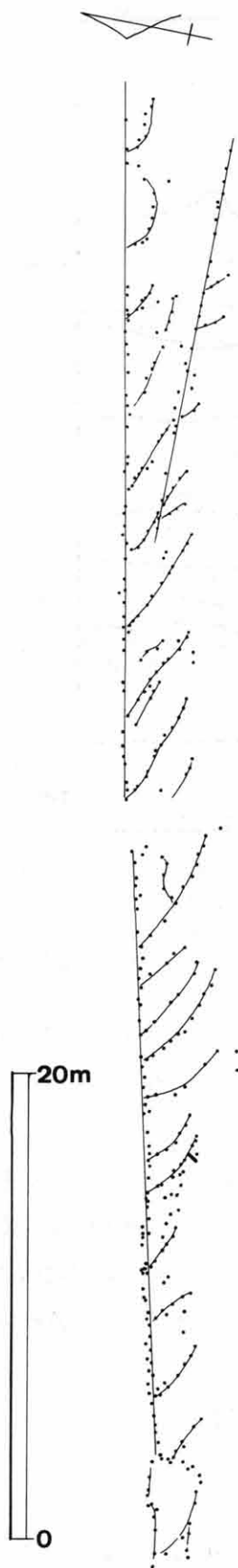
4. 護岸施設の杭列S X 36675の構造的検討と施工目的

杭列S X 36675が、流路S X 36604よりは新しく、条坊施工のための整地層より古いことは、既に確認したが、ここでは、構造的検討及び樹種の同定について述べた後、施工の目的について私



第3図 四条条間小路周辺土層堆積状況図

- | | |
|----------------|--------------------|
| 1. 造成土 | 2. 旧耕作土 |
| 3. 床土 | 4. 鎌倉・室町遺構面 |
| 5. 長岡京期整地層 | 6. 杭列S X 36675盛り土? |
| 7. 流路S X 36604 | |



第4図 杭列S X 36675模式図

見を提示したい。

杭列S X 36675(第4図)は、北から東へ78°の方向に主軸をもつ直線的な杭列と、僅かに湾曲する枝状の杭列からなる。直線的な杭列の西端は、隅丸長形状の杭列の短辺中央部に端を発し、概ね110本から構成されている。基本的には途切れることなく打ち込まれているが、先述した流路S X 36604の北東の杭群との接続部分は、やや不明瞭である。一方、枝状杭列は、21列を数えており、僅かに南東に湾曲する特徴が見られる。枝状杭列を構成する杭数は、多い列で12本、少ない列で5本を数える。必ずしも規則的に配列されている状況ではないが、概ね3列毎に長い杭列を配置する傾向が見られる。

杭列S X 36675の中心を成す直線的な杭列は、トレンチ北東においては不明瞭であるが、概ね $X=-118,610m \cdot Y=-26,420m$ を起点し、ほぼ $X=-118,610m$ に沿って直線的な杭列に施工変更されている。また、概ね $X=-118,615m \cdot Y=-26,405m$ を起点とする枝状杭列からほぼ $X=-118,615m$ に沿って、直線的な杭列がのびている。これらの2列の直線的な杭列は、左京第366次調査の第5トレンチにおいても検出しており、枝状杭列によって構成される杭列S X 36675の杭列が、最終的には、2列の杭列に集約されていることが確認できた。

一方、杭列S X 36675に使用されている杭は、太い用材で0.25m角、細い用材で0.15m角を測り、長さは1~1.5mを測る。また、杭の先端部分は全て尖頭状に削り込まれており、打ち込まれた角度は、地面に対して直交する杭が大半であるが、ほぼ平行するように打ち込まれた杭も確認できる。樹種については、「奈良時代自然流路S X 36604及び杭列S X 36675検出杭材の樹種同定^(注5)」の同定結果から檜材ではなく、針葉樹のツガ属であることが判明している。また、これらの杭列を検出した遺構面は、条坊施工以前に堆積した淡茶褐色砂層であることから、堤状の護岸施設自体は、既に後世の削平を受けたとみられる。そのため、現状では護岸施設の形態は知り得ないが、検出した杭列S X 36675は、その基礎をなすものと想定できる。

以上が、護岸施設の杭列S X 36675の基本的な構造であるが、当該調査地より概ね300m北東方で実施された府立向陽高等学校建設に伴う発掘調査^(注6)においても同様な杭群が検出されている。検出された杭列は、中央にやや湾曲した核をなす杭列が位置し、3方向から

細い杭列が取り付いている。報告書を見る限り、今回検出した杭列と一連の杭列である可能性は極めて高いといえる。また、その調査においても長岡京期の掘立柱建物跡検出面下で杭群を検出しており、少なくとも長岡京期以前であることが確認されている。

最後に、当該遺構を確認した地点の地理的条件について概観するとともに、施工目的について私見を提示したい。

長岡京内には、京域をほぼ縦断するように小畑川が南流しているが、長岡京造営時の旧河道は、向日丘陵の先端部から四条大路に沿ってほぼ東流していたことが、多くの発掘調査により確認されている。今回の調査地点は、段丘端部に隣接し、なおかつ、扇状地形の基部にあたる。また、小畑川の旧河道の北方に隣接していることから、護岸施設の杭列S X36675は、小畑川の旧河道の氾濫を規制し、一定の方向に河道を固定する河川改修が、主な目的であった可能性が指摘できる。一方、300m離れた地点においても同様な河川改修を示唆する杭群が確認されている事実は、広範囲にわたって河川改修を行なう必要があったことを示している。特に、調査地で検出した護岸施設の杭列S X36675は、極めて丁寧に打ち込まれており、旧河道の中でも最も氾濫が激しかったことを物語っている。

その目的としては、先述した概説書にあるように、水田に水をひく用水路も視野に入れる必要があるが、当該地周辺では、奈良時代の水田址及び集落址は確認されていないのが現状である。また、用水路の場合、両肩に護岸施設を設ける必要があるが、杭列S X36675の枝状杭列は、直線的な杭列の南方にのみ取り付け、なおかつ、南東方向に湾曲していることから、明らかに杭列S X36675の南方を東流する旧河道の氾濫を規制する目的があったことが想定できるのである。

今回、想定した杭列は、300mにも及んでおり、奈良時代の河川改修事業としては、極めて大規模である。また、奈良時代の集落が、周辺一帯で確認されていないことを勘案すると、これらの河川改修事業は、長岡京造営に伴う国家的事業である可能性が最も高いといえる。

施工時期については、四条条間小路の南側溝下で検出しており、長岡京期ないしその直前と考えておきたい。

5. まとめ

以上述べたように、護岸施設の杭列S X36675は、小畑川の旧河道の氾濫を規制し、河道の固定を目的に行なわれた国家的事業であった可能性が高く、その施工時期の設定は、長岡京造営と密接に係わっているといえる。長岡京は、天皇の詔が存在しないものの、「続日本紀」の延暦三年の条などから784年に造営を開始したとされている。今回、検出した護岸施設の杭列S X36675に代表される大規模な河川改修事業は、具体的に長岡京造営を証明する条坊施工の前段階の国家的事業として認識すべきである。当該遺構の存在は、長岡京造営時期を文献以外の資料で検証する上で重要な意味を持っている。

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第4係調査員)

- 注1 大塚初重・白石太郎・西谷 正・町田 章編『自然環境と文化』（考古学による日本歴史16 雄山閣出版）1996
- 注2 小池 寛「長岡京跡左京第366次・中福知遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第75冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1997
- 注3 小池・前掲注2 文献
- 注4 小池 寛「長岡京跡左京第353次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第69冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1996
- 注5 小池・前掲注2 文献において、同定委託したバレオ・ラボ社・藤根 久氏の同定報告を全文掲載した。なお、同定成果は、当調査研究センターで保管している。
- 注6 高橋美久二「長岡京跡左京三条二坊第1次発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1975)』京都府教育委員会）1975
- 注7 概報作成時に公表されている調査成果については、確認作業を行なった。また、向日市埋蔵文化財センター長 山中 章氏から多くのご教示を受けた。感謝いたしたい。

内里八丁遺跡第10次の発掘調査

古瀬 誠三・森下 衛・柴 暁彦

1. はじめに

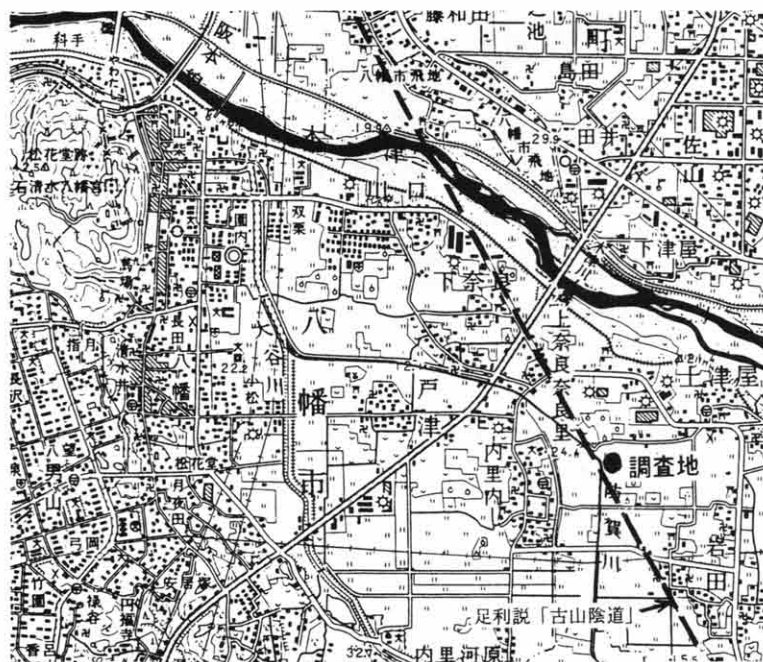
今回の発掘調査は、第二京阪自動車道路建設に先立ち、日本道路公団の依頼を受けて実施した。

第二京阪自動車道路建設に先立つ内里八丁遺跡の発掘調査は、広範囲な調査対象地をA～Gの7地区に分け、昭和63年度から進めてきた。うち、平成8年度までに9次の調査を行い、A～D地区並びにF地区北半部(F-1地区)の調査を終了した。平成8年度は、これに引き続いて第10次調査として実施し、E地区(約1,000m²)及びF地区の南半部(約3,000m²)を対象とした(第2図)。

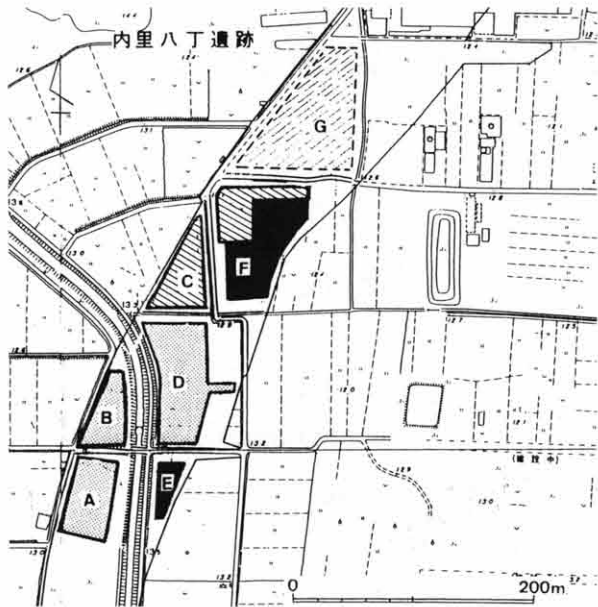
内里八丁遺跡は、八幡市の北東部、石清水八幡宮の鎮座する男山丘陵の東方約3kmに位置する(第1図)。現在、一帯は木津川西岸の沖積平野が広がり、平坦な水田地帯としての景観をなしている。しかし、周辺には木津川の支流だったと思われる旧河道の痕跡や、その両岸に形成された自然堤防状の微高地などが認められ、かつては比較的起伏に富んだ地形をなしていたことが想像される。内里八丁遺跡は、この自然堤防状の微高地の一つ、現在の上奈良集落から岩田集落を結ぶように広がる微高地上に立地している。

なお、内里八丁遺跡の過去の調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の集落跡や水田跡、古墳時代中期後半～後期初頭の集落跡、飛鳥時代～平安時代の掘立柱建物跡群、鎌倉時代以降に形成された「島畑」などが検出されている。特に、奈良～平安時代の遺構・遺物に関しては、遺跡の北方にある上奈良・下奈良という地名から『延喜式』記載の奈良園との関連が考えられるほか、奈良時代には「古山陰道」がこの近傍を通っていたとの説^(注1)もあり、これに関連した何らかの公的施設との関連も想定されている。

(森下 衛)



第1図 調査地位置図(1/50,000)

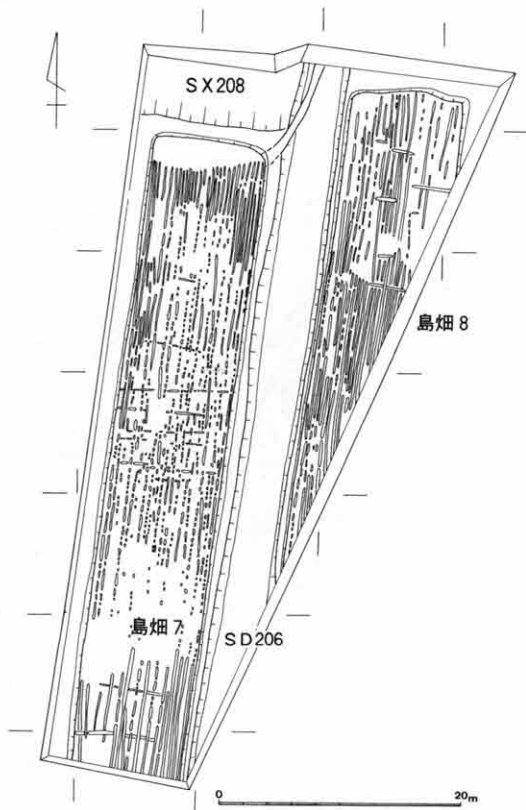


第2図 調査区配置図

年10月)までに調査を終えた奈良時代～鎌倉時代に係る調査成果の概略について報告することにしたい。

(1) E地区の発掘調査

① 鎌倉時代以降(第1遺構面：13世紀後半以降)



第3図 E地区第1遺構面遺構配置図

2. 調査の概要

平成9年度の調査では、最終的に、E・F地区とも6面の遺構面を確認している。時期的には、弥生時代後期～鎌倉時代にわたる。これらを時期別に整理すると、弥生時代後期、弥生時代後期終末～古墳時代前期、古墳時代中期後半、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代～平安時代前期、平安時代中期～後期、平安時代末葉、鎌倉時代以降に分けてとらえることができる。

ただし、これらの中には、現在も調査中の遺構もある。このため本稿では、調査成果速報として、平成9年度上半期(平成9

まず第1遺構面として、島畑と呼ばれる畑地の痕跡を2か所確認した(島畑7・8)。いずれも、調査区外へのびており、全体の規模・形状は不明であるが、南北に細長い長方形をなすものと考えられる。幅は、ともに13m前後を測り、長さは50m以上である。こうした島畑は、これまでの調査でも検出しており、鎌倉時代の後半期(13世紀後半～14世紀)以降に造成されていたことを確認している。また、島畑の上面では、一面で素掘り溝群を検出した。溝群は、幅15～30cmで、畑作に伴う畝溝と考えられる。また、2つの島畑の間では、幅約4mの南北溝(SD206)を検出した。島畑の造成によって作られた低部の排水に係わるものと思われる。

なお、島畑の北側は、沼ないしは溝をなすように大きく下がっていく状況が認められた(SX208)。

②平安時代末(第2遺構面：11世紀後半～12世紀)

第2遺構面では、平安時代末(11～12世紀)の遺構を確認した。主な検出遺構には、掘立柱建物跡3棟(SB212～214)、井戸2基(SE204・205)、土坑3基(SK201・210・211)がある。

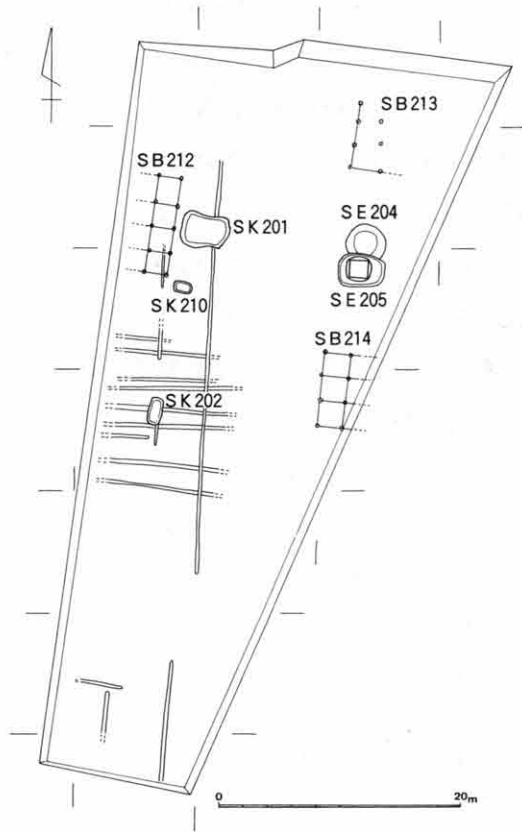
掘立柱建物跡は、後世の削平により遺存状況が悪いことや、大半が調査区外へのびていることなどから、いずれも全体の規模は確認できない。唯一、SB212が南北4間、東西が2間以上であることが確認されるにすぎない。主軸はいずれも北に向かってわずかに東に振る。時期的には、柱穴内の出土遺物などから、12世紀頃のものだと判断している。また、土坑3基のうちSK201はSB212に東接して検出したもので、建物の廃絶に伴って設けられたものと考えている。12世紀後半頃の瓦器碗などが出土した。

井戸は、調査区の東辺寄りで2基が重複して検出された。SE204は、径約2mの円形の掘形を確認したに過ぎず、井戸枠等は確認できなかったが、SE205は蒸籠組みの井戸枠を残し(一辺約1.2mの方形)、深さ約1.8mが遺存していた。埋土中から11世紀後半頃の遺物が出土した。

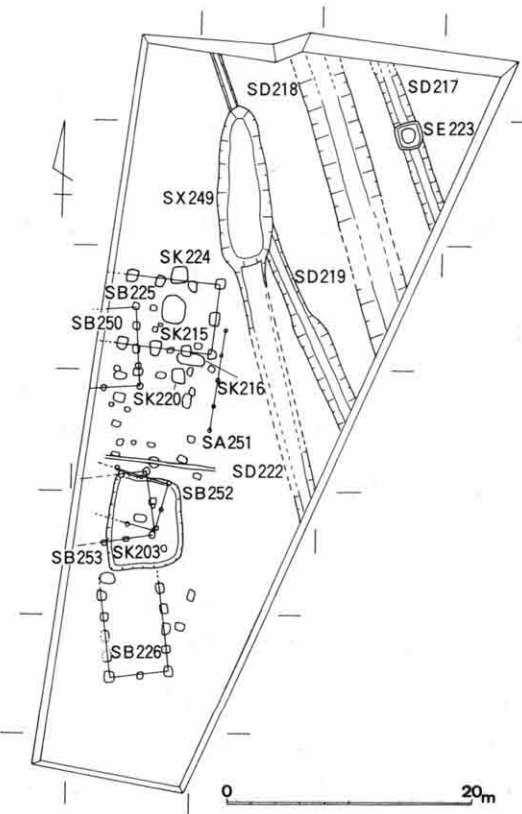
③奈良時代～平安時代前期(第3遺構面)

第3遺構面で検出した遺構は、調査区東半部の南北溝4条及び井戸1基と、西半部で検出した柱穴群(現在、掘立柱建物跡を5棟、柵列を1条復元)及び土坑5基がある。

南北溝(SD217～219・222)は、いずれも北北西-南南東(座標北に向かってN-15～20°-W)にのび、溝幅は、SD217及び219が約1.5m、SD218が約4m、SD222が約3mを測る。これら溝は、時期的にみてSD217・219、SD218・222がそれぞれセット関係をなす。すなわち、SD217とSD219は規模・断面形が類似し、



第4図 E地区第2遺構面遺構配置図



第5図 E地区第3遺構面遺構配置図

出土遺物も8世紀中葉～9世紀前半のものが出土する。また、溝心々間で約12mを測り、平行してのびる。S D218とS D222も、ともに9世紀後半から10世紀前半頃の遺物が出土し、一部は平行してのびる(溝の肩間の距離は5～6m)。ただし、S D222は調査区北端近くで、溜まり状遺構(S X249)に流入し、その北側は、中世～近世の沼または溝で大きく削平されており、どのようにのびるのか明らかでない。こうした検出状況から、前者は、幅約12mの道路側溝を構成していたと考えている(時期的には奈良時代～平安時代初頭)。一方、後者に関しては、遺存状況が悪く途中で途切れることや、両溝間に規模の差が認められるなどの点で問題もあるが、こちらも幅5～6mの平安時代前期の道路側溝を構成するものと判断している。すなわち、奈良時代中葉～平安時代初頭に幅12mで設けられた道路が、平安時代前期に規模を縮小して造り変えられたものと考えられるのである。このことを示すように、調査区の西半部で確認した多くの柱穴は、道路面をなす調査区の東半部へは及んでおらず、道路が廃絶して以降に設けられた井戸が溝に重複して確認されているにすぎない。S E223は、S D217が埋没した後に穿たれたもので、9世紀後半頃の遺物が出土した。深さ約1.3mが遺存し、井戸枠は下半部に径約1mの丸太材をくり貫いたものを据え、上半部は幅約0.2mの板材を縦に据え、一辺約1.2mの方形に組まれたものであった。

一方、調査区西半部では、多数の柱穴を検出した。しかし、このうち、現在までに建物跡を構成することが判明したものはわずかで、ここでは、掘立柱建物跡5棟及び柵列1条を提示できたにすぎない。この5棟のうち、建物の主軸や出土遺物などから明らかに奈良～平安時代に属すると判断されるのはS B225・252の2棟であり、他は7世紀末ないしは8世紀初頭に遡るものと考えられる。S B225は南北2間、東西3間以上の東西棟建物で、柱掘形は一辺約1mの方形をなし、これまでの調査で検出した建物跡の中でも大型の部類に入る。また、S B252も南北2間、東西2間以上の東西棟建物と考えている。いずれも主軸は北に向かって東へ振る。S B225が平安時代前期(9世紀)、S B252は平安時代中期(10世紀)の建物と判断している。柵列(S A251)は、南北に4間分を確認したもののだが、柱穴の形態やその主軸などからS B252と同時期のものとして判断している。他の3棟はほぼ柱筋を揃えるように南北に連なって検出されたもので、S B226が東西2間、南北4間以上、S B253が東西2間以上、南北2間、S B250が南北4間、東西2間以上をなす。なお、この3棟の建物に関しては、本遺構面では、不明な部分も多く、さらに掘り下げた第4遺構面で全容の判明するものがある。時期的にも若干遡る可能性があり、詳細は、改めて報告することとしたい。

土坑5基(S K203・215・216・220・224)のうち、特にS K203は南北約5m、東西約4mの隅丸長方形をなし、深さ約0.2mが遺存していた。埋土は、灰や焼土が混在し、ブロック状のまとまりをなす8世紀中葉～9世紀初頭の土器群が包含されていた。土器群は、須恵器杯身や土師器皿など供膳形態のものが主体をなすが、中には多くの製塩土器が含まれており注目された。こうした遺物群は、先の道路遺構の傍らで行われた儀式的な行為に伴って使用され、廃棄されたものと考えている。なお、先の道路遺構の側溝としたS D219の埋土から出土した遺物も、S K203出土遺物とほぼ共通する内容をもつ。

(古瀬誠三・森下 衛)

(2) F地区の発掘調査

①鎌倉時代以降(第1遺構面：

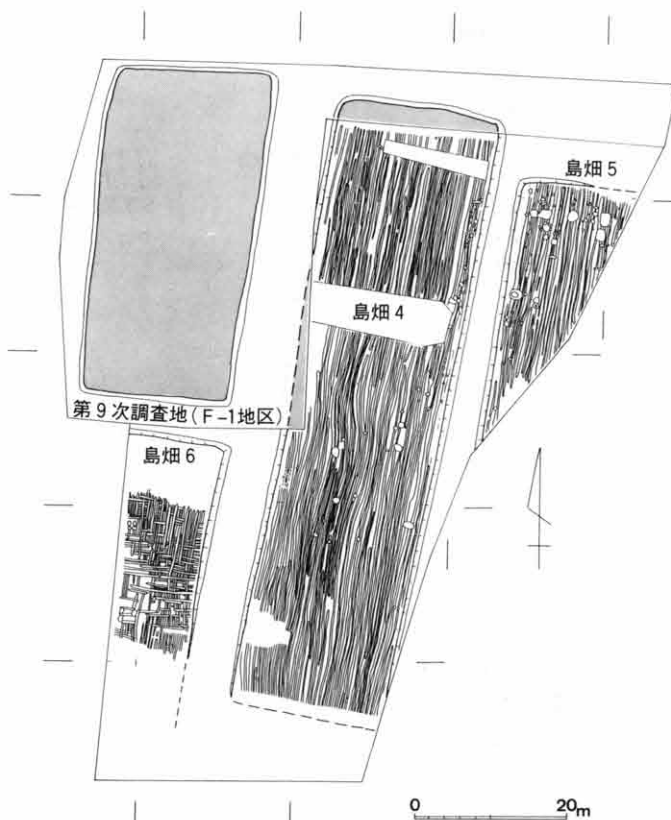
13世紀後半以降)

F地区の調査でも、E地区と同様に、まず島畑を3基検出した(島畑4～6)。うち、島畑4は、調査区中央で確認したもので、南北約80m、東西約21mを測る。島畑5・6は、大半が調査区外へ延びており、全体の規模は不明である。各島畑上では一面に南北方向に延びる素掘り溝群を検出した(溝幅15～30cm)。畑作の痕跡を示す畝溝と考えられる。これら畝溝は、細かな川砂が堆積しているものが多く、大半が川の氾濫によって埋没したものであると思われる。また、畝溝は全てが同時に存在したのではなく、何度も繰り返して営まれたものが重複して見つかった状況であった。なお、島畑6では、初期の島畑が形成されて以後、東側へ拡張されていることを確認している。

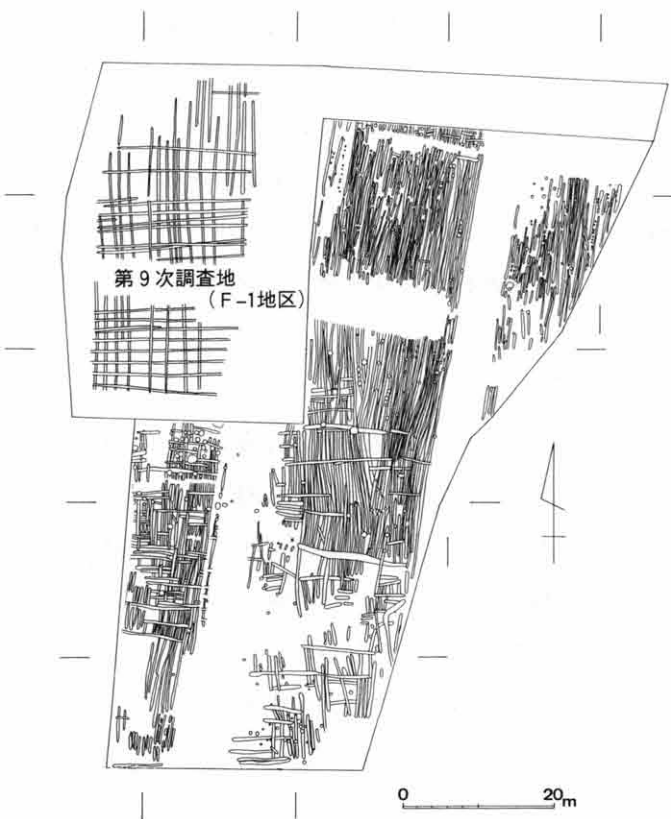
②平安時代末(第2遺構面：12～

13世紀前半)

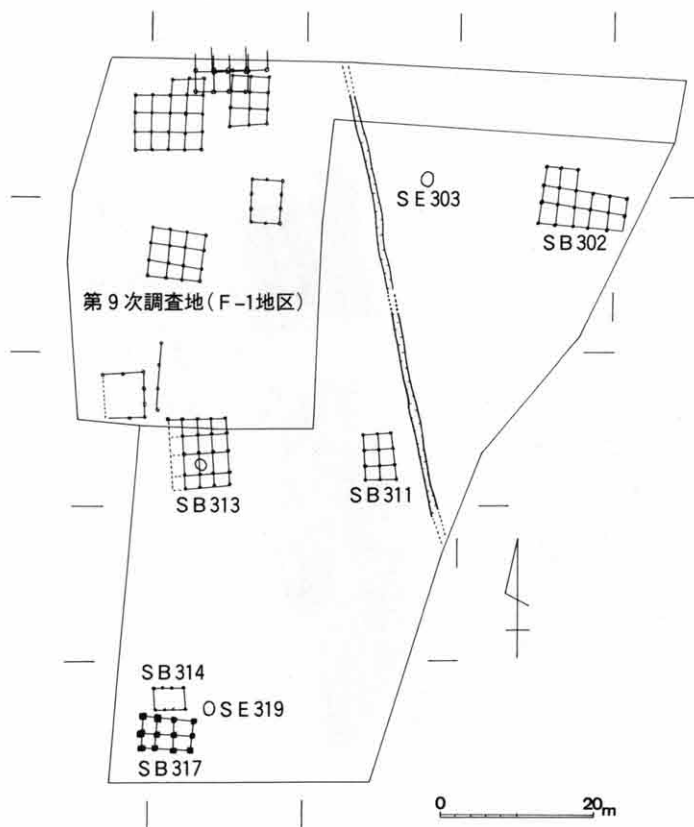
第2遺構面でも、一面で素掘り溝群(幅15～30cm)を検出した(ただし、先の島畑が造成された際に、これ以外の部分は大幅な削平を受けたため、遺構が検出されたのは島畑部分に限られた)。島畑が形成される以前に、当地で行われていた畑作の痕跡を示す畝溝と考えている。溝は、南北方向に延びるものが主体をなす。その方向を細かくみれば、第1面の畝溝に比べ、やや東へ振るもの



第6図 F-2地区第1遺構面遺構配置図



第7図 F-2地区第2遺構面遺構配置図



第8図 F-2地区第3遺構面遺構配置図

や、西へ振るものなどがある。こうした耕作の方向が、周囲の地割りを反映しているとすれば、時代を経るに従って、徐々に周囲の地割りが変化したことを示すものと考えられる。なお、この遺構面では、いくつかの柱穴状ピットを確認しているが、掘立柱建物跡としてまとまるものは確認できていない。

③奈良時代～平安時代(第3遺構面：8世紀後半～11世紀)

第3遺構面では、耕作地としての痕跡はほとんど検出されず、居住域としての土地利用を示す遺構を検出した。主な検出遺構には、掘立柱建物跡6棟、井戸、溝などがある。

掘立柱建物跡(SB 302・311・313・314・317)は、昨年度のF地区

北西部の調査成果を合わせると、計14棟を確認したこととなる。概ね10世紀後半～11世紀初頭のものが主体をなし、3間×3間以上の主屋1棟に2間×3間の附属建物1棟がセットをなすものと考えられる。今回検出したもののうちでは、SB 302(2間×5間の東西棟)、SB 311(2間×3間の南北棟)、SB 313(4間×4間の東西棟)、SB 314(1間×3間の東西棟)がこれに属し、出土した遺物などから、10世紀後半を中心とした時期のものとして判断している。また、SB 317は、2間×3間の東西棟の総柱建物で、柱掘形は方形をなし、奈良時代後半～平安時代初頭に属すると考えている。

井戸(SE 303・319)のうち、SE 303は、直径約2.2mを測る素掘りの井戸で、深さは約2.1mある。出土遺物には土師器皿・瓦器椀・黒色土器などがあり、11世紀頃のものと考えられる。

溝(SD 307)は、幅約1.3m、深さ約0.45mを測る北西-南東方向の溝で、総延長約50m分を検出した。出土遺物から、建物跡群と同じ、10世紀頃のものと考えられる。

なお、図示していないが、本遺構面では、上記の遺構に加え、第1遺構面から引き続き素掘り溝群を検出している。その分布状況は比較的希薄であるが、溝群には建物跡の柱穴を切るものや切られるものが混在しており、居住区としての土地利用が行われていた時期にも、空間地は耕作地となっていたものと思われる。

(柴 暁彦)

3. まとめ

以上が、平成9年度発掘調査の上半期(平成9年4月～10月まで)の調査成果である。これらを時代を追ってまとめると、以下のとおりとなる。

①E地区では、奈良時代中葉～平安時代前期にわたって、調査区の東半部を南南東―北北西の方向に通っていた道路遺構を2条検出した。道路は、幅約12mの奈良時代中葉～平安時代初頭のものが、平安時代前期に幅5～6mのものへ造り変えられたと判断された。前者は、時期的な面やその規模などから、従来から当地に推定されてきた古山陰道の可能性が極めて高い^(注2)。一方、後者は、平安時代になり、平安京と南都とを結んでいた官道であったと考えられる。

②同時期のE地区西半部には、掘立柱建物跡や土坑が認められるが、状況からみて、道路に関連する公的な施設の一部であった可能性が高いと考えている。特に、SK203から出土している遺物は、道路側溝と考えているSD219の出土遺物と共通した内容を示しており、その傍らで行われた何らかの儀式的な行為に伴って使用されたものが捨てられたものと考えられた。

③平安時代中期～後期、F地区では20～30mの間隔をおいて、大小の掘立柱建物跡がセットをなし、数か所に分布していたことが確認された。建物跡は、その規模や形態から、当時の一般集落を構成していたものと考えられ、建物跡が認められない部分は、耕作地(畑地)として利用されていたようである。

④平安時代末葉には、E地区では道路は既に無く、集落の一部が確認された。道路側溝と考えている溝に重複して11世紀の井戸や12世紀の掘立柱建物跡が確認された。

⑤また、F地区では、この時期、一面が耕作地として利用されはじめたようで、幾重にも重複した畝溝が広がっていた。なお、その畝溝の方向は、北北西―南南東から北北東―南南西へと変化しており、一帯の地割りがこのように変遷したことを示唆していた。

⑥鎌倉時代になると、E・F地区ともに、島畑が造成されはじめ、以後、徐々に現在のような景観へと変遷していったものと思われる。

(森下 衛)

(ふるせ・せいぞう＝当センター調査第2課調査第3係主査調査員)

(もりした・まもる＝同調査員)

(しば・あきひこ＝同調査員)

注1 足利健亮『日本古代地理研究』(株)大明堂 1985

注2 近年、足利説の古山陰道復元ルートに対して、ここが低湿地にあたっていることなどから、山崎橋を渡航するまでは山陽道と同じルートを辿っていたとする説が多くなっていった。また、足利氏の復元されている古山陰道ルートと、今回検出した道路遺構とでは、位置やその方向性など、完全に一致しているわけではない。しかし、足利説ルートは、明らかに自然堤防上に相当しており、道路を設置するのに不適切な場所とは言いきれない。また、今回確認した遺構と足利説とのずれについては、当地が、西側にある旧流路の屈曲点付近に相当していることなどから、これを避けるように道路が若干迂回していた可能性も考えられる(足利健亮氏のご教示による)。

椋ノ木遺跡第3次の発掘調査

森島康雄

1. はじめに

椋ノ木遺跡は相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木・神ノ木・柳垣内・脇田に所在する集落遺跡である。遺跡は木津川左岸の微高地上に立地する。

この遺跡の調査は、木津川上流浄化センターの建設に伴い、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが京都府土木建築部の依頼を受けて、平成7年度から実施しており、今年度は第3次調査にあたる。調査は、浄化センター内に建設予定の各施設の工事計画に従って、順次、トレンチを設定して行った(第2図)。

昨年度までの調査では、遺跡が、木津川の直近に位置するにもかかわらず、近世に至るまで、洪水の被害を受けた形跡がなく、安定した遺構面が存在することが確認され、また、中世の集落の西を限るとみられる溝や井戸・建物・土墳墓など多数の遺構が検出されたほか、調査地周辺に見られる1町(約109m)四方の方格地割りの起源が、少なくとも平安時代末までさかのぼることが明らかになるなどの成果を得ている。

今年度は、まず、昨年度に試掘調査を行った水処理施設南東隅の4-1トレンチと、北東隅の4-5トレンチの拡張を行った。

4-1トレンチ拡張区は、周辺に見られる方格地割りの交点付近に当たる部分である。顕著な遺構は検出されなかったが、畦畔状の高まりを境に土層の堆積状況に違いが見られることが確認され、調査前に見られた土地の境界が中世までさかのぼることがわかった。

4-5トレンチ拡張区は、昨年度に溝状遺構の南の肩を検出していた部分を拡張した。検出が期待された溝状遺構の北の肩は、調査区内では検出されなかった。6トレンチの調査成果と併せて



第1図 調査地位置図(1/200,000)

考えると、4-5トレンチで検出した肩は、椋ノ木遺跡の集落域の北端を示すもので、それより北側は、一段低い耕作地となっていたと考えることができる。

次いで、3・6・7トレンチの各調査区を対象に試掘調査を行った。

6トレンチでは、地境を示す畦や溝と耕作溝が検出され、周辺が耕作地であったことが判明し、3・7トレンチでは、多数の遺構が検出された。協議の結果、3・7トレンチについては、調査区を拡張することになった。

2. 調査概要

3トレンチと7トレンチで検出した主な遺構は以下のとおりである。

(1) 3トレンチ(第3図)

建物1 調査区中央部で検出した、東西5間以上×南北4間の掘立柱建物跡で、西辺には廂がつく。柱間は東西が約2.2m、南北が約2.0mである。廂部分を含めると東西12.5m以上・南北8mの大規模な建物跡である。北西端の廂の柱穴には、柱を抜き取った後に瓦器椀が埋められていた。時期は、12世紀後半頃と考えられる。

溝1 トレンチの北部を東西にほぼ直線的に貫く幅1.5～2.5mの溝である。溝の下層からは完形品を含む土器類が多量に出土した。その年代は、12世紀後半である。一方、溝の上層には、直径10～20cmの礫が一面に広がっ

ていた。この溝が埋められた後、時を経て、浅い溝状の窪地になっていたところに、礫を帯状に捨てたものと思われる。この礫の中から出土する土器には14世紀のものが見られる。

溝2 溝1の南側で検出した、溝1に平行するほぼ同規模の溝であるが、調査区西端で南に直角に曲がる。時期は12世紀後半であるが、溝1よりわずかに新しいと考えられる。建物1を囲むように掘られていることから、建物1を中心とする屋敷地を画する溝と考えられる。

溝3 調査区中央部を東西に貫く溝である。溝の上層では溝埋没後に並べられた直径10～20cmの礫が検出された。時期は、14世紀と考えられる。この溝の位置は、調査地周辺に見られる方格地割りを二等分する位置にあたる。

土坑1 調査区北西隅で検出した東西4.0～5.0m・南北9m以上の浅い土坑である。土坑の北端付近の底には直径3cm前後の礫が敷き詰められている。時期は、14世紀とみられる。

土坑2 溝2の南側で検出した直径2.5m程度の円形の土坑である。土坑内には土師器皿や瓦器皿を中心とする多量の土器がぎっしりと堆積していた。時期は、12世紀中葉頃と思われる。

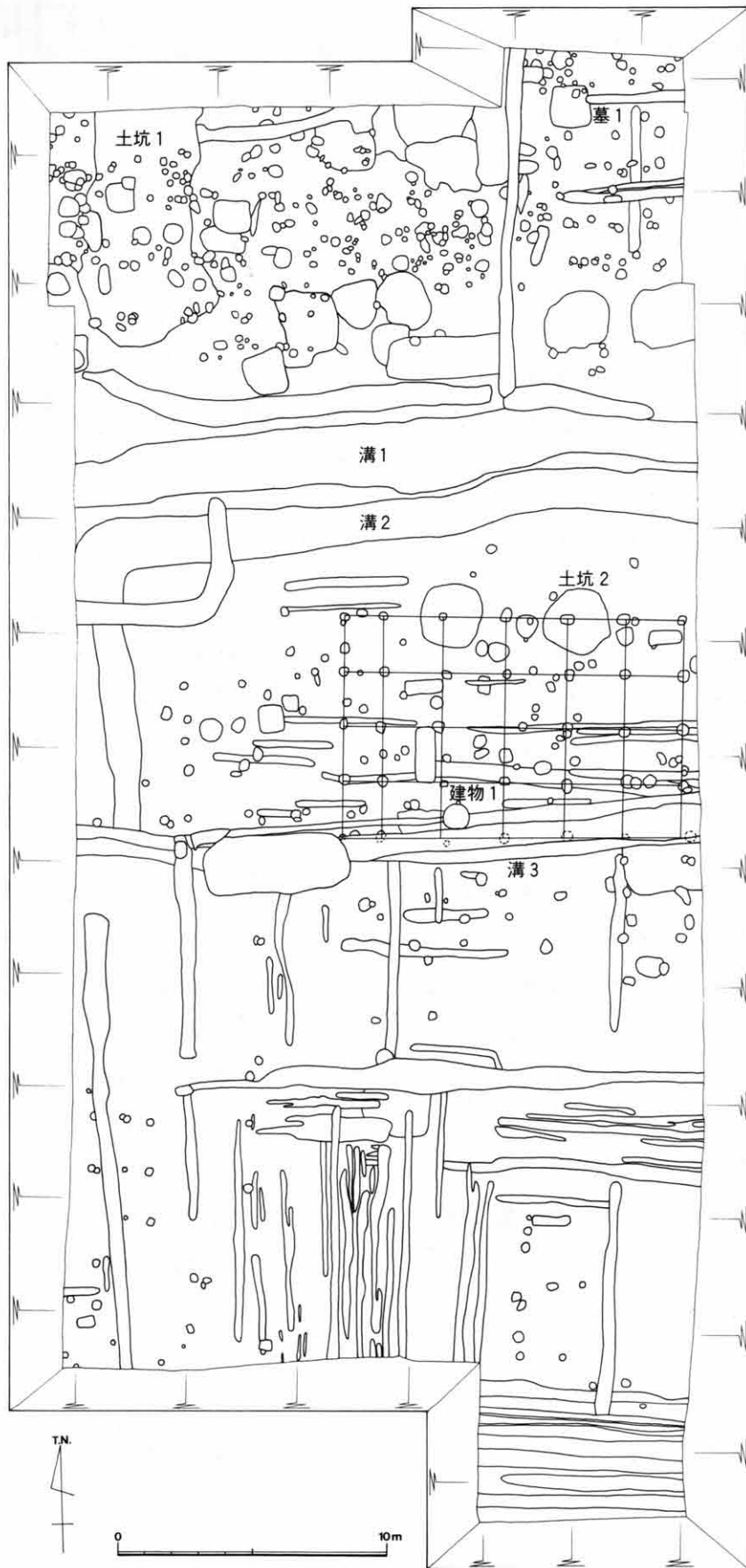
墓1 一辺1.5mのほぼ正方形の掘方を持つ墓である。骨の一部と歯が残っていたことから、北頭位で埋葬されたことがわかる。頭の東側には土師器小皿6点と白磁椀V類1点、胴部の東側には土師器大皿が1点、腰付近には直径35cm程度の薄い円板が1点副葬されていた。出土遺物から、13世紀初頭頃に埋葬されたものと考えられる。

(2) 7トレンチ(第4図)

建物2 調査区北部で検出した東西2間×南北2間以上の掘立柱建物跡である。規模は、東西



第2図 トレンチ配置図(1/5,000)



第3図 3トレンチ平面図(1/250)

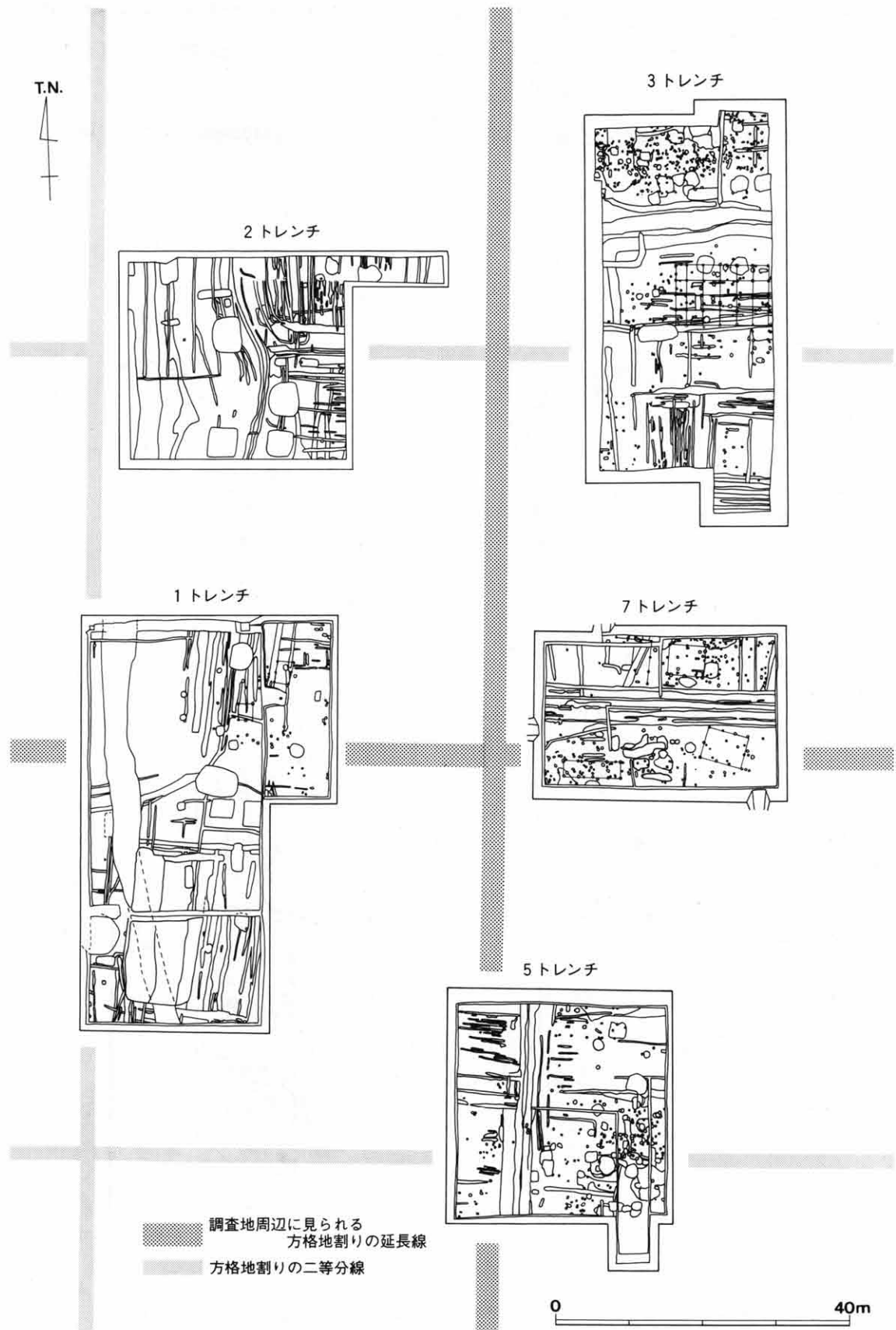
5.0m・南北4.1mである。

建物3 調査区南東部で検出した東西3間×南北2間の掘立柱建物跡である。建物跡の軸線が真北から大きく東に振っている。溝4とはほぼ平行することから、溝4と同時期の可能性が考えられる。規模は、東西5.8m・南北4.2mである。

建物4 調査区南西部で検出した東西5間×南北1間以上の掘立柱建物跡である。規模は東西7.8m・南北2.2mである。



第4図 7トレンチ平面図



第5図 1～3・5・7トレンチ平面略図(1/800)

柵1 建物2の西側で検出した。北辺を建物2とほぼそろえている。

溝4 建物2の西側で検出した幅約1.0mの溝である。出土遺物から13世紀前半の溝と考えられる。方向は、建物3とほぼ一致している。

溝群5 調査区中央を東西に貫く溝群である。トレンチの壁面を観察すると、中世～近世を通じてこの場所に溝が作られていたことがわかる。この溝群の位置は、周辺の方格地割りのラインにほぼ一致する。

墓2 建物4の北側で検出した中世墓である。墓壙の規模は南北1.6m・東西1.0mである。墓壙に直接遺体を納め、板材で蓋をして埋葬したもので、木蓋土壙墓と呼ばれるものである。墓壙内の北寄りには白磁椀2点(Ⅳ・Ⅷ類)、土師器大皿1点、土師器小皿9点が副葬されていた。副葬品の位置などから、北枕で埋葬されていたと考えられる。頭の位置付近には人骨が残っていた。時期は、12世紀中葉頃と考えられる。

3. まとめ

3トレンチでは大規模な掘立柱建物跡とそれを囲む溝の一部など、12世紀後半(平安時代後期)の屋敷地の一面を検出した。溝1の北側も、建物を復原することはできていないが、柱穴が密集していることから別の屋敷地の一部と考えることができる。14世紀には方格地割りを二等分する位置に溝が掘られ、土地の区画が変わっていることがわかる。また、13世紀初頭の墓は、溝1の北側の屋敷地に伴う屋敷墓の可能性がある。7トレンチでは方格地割りの境の溝や掘立柱建物跡などのほか、中国製の白磁椀を副葬した中世墓を検出した。

最後に、平成7年度から順次行ってきた調査で、これまでにわかってきたことをまとめると、以下ようになる(第5図)。遺跡の南半部(旧浜道より南側)では、東寄りの3・5・7トレンチで特に遺構が密集して検出された。3・5・7トレンチ付近は、遺跡の中でも最も高い位置にあり、5トレンチで検出された方格地割りの境の南北溝から東側が遺跡の中心部分であると考えられることができる。この範囲では、12世紀を中心に14世紀までの遺構が数多く検出された。一方、1・2トレンチでは南北に100m以上にわたって続くと思われる溝が検出された。この溝は集落の西を限るものと考えられ、集落の中心からこの溝までの間には耕作溝が目立つほか、13世紀の遺構が散在している。そして、13世紀にはこの溝も埋められ、遺構がさらに西に広がっていく。

遺跡の北半部では4-3トレンチ付近を中心に顕著に遺構が検出されたが、南半部に比べると、13世紀以降の遺構が目立つ。遺跡の南半部にあった12世紀の集落が北側にも広がったことがわかる。そして、4-5トレンチで検出した北に向かって落ちる肩が、遺跡の立地する微高地の北辺で、集落の北限になると考えられる。

このように、椋ノ木遺跡の調査では、この地の中世集落の中心部分や範囲、集落の変遷について明らかにすることができた。

(もりしま・やすお=当センター調査第2課調査第3係調査員)

平成9年度発掘調査略報

13. いくのうちの城跡

所在地 竹野郡網野町生野内地先
 調査期間 平成9年11月5日～平成9年12月17日
 調査面積 約190m²

はじめに 今回の発掘調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している丹後国营農地(国营東部)郷2団地造成に伴って実施した。調査対象地は、日本海に注ぐ福田川中流域の山間地にあり、生野内集落の北約500mの丘陵部に位置している。調査対象地は、4本の尾根の5か所に分散している。調査の便宜上、調査対象地にA～E地点の名称を与えた。

調査概要

A地点 主尾根から派生する小さな支尾根上の緩傾斜地に位置する。2本の試掘トレンチで調査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

B地点 A地点と同一の主尾根から派生する支尾根上にある。トレンチ調査を行うが遺構・遺物は確認されない。

C地点 尾根頂部と稜線上の平坦地に5本のトレンチを設けた。尾根頂部のトレンチから小型円形炭窯1基を検出した。遺物の出土はみられない。

D地点 尾根頂部にトレンチを設けた。遺構・遺物は確認されない。

E地点 尾根先端部に位置する。7本のトレンチを設けたが、遺構・遺物は確認されない。なお、丹後震災に伴う地割れ数本が尾根筋に併走していた。

まとめ 今回の調査地点は、城跡の可能性のある平坦地と、古墳状隆起部分が対象となった。調査の結果、C地点から時期不明の炭窯1基を検出したが、それ以外に遺構・遺物はみられない。以上の状況から、今回の調査地点について城跡や古墳としての認定はできないと判断される。

(竹原一彦)



調査地位置図(1/25,000)

14. 横^{よこ}枕^{まくら}遺跡

所在地 竹野郡網野町字島津小字横枕
 調査期間 平成9年10月8日～12月19日
 調査面積 約530m²

はじめに 今回の調査は、府営一般農道整備事業に先立ち、京都府丹後土地改良事務所の依頼を受けて実施した。横枕遺跡は、弥栄町鳥取から網野町の離湖にぬける谷筋に張り出す丘陵先端と、その麓に広がる遺跡である。平成7年度に網野町教育委員会によって試掘調査(第1次調査)が行われており、今回の調査は第2次調査となる。第1次調査では、平安時代及び鎌倉時代の遺物が出土しており、特筆すべきものに緑釉陶器、輸入陶磁器、転用硯、面取りによって八角形に仕上げられた直径約30cmの柱がある。

調査概要 今回の調査では、第1次調査の成果を受けて、谷部に1か所(第1トレンチ)と丘陵部に4か所(第2～5トレンチ)のトレンチを設定した。調査の結果、平安時代と鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。

①検出遺構 平安時代の遺構は、柱穴群・竪穴状遺構1基・井戸1基・土坑1基・鍛冶関連土坑9基である。柱穴は、第1トレンチの西側で検出した。調査面積が狭いため、建物跡になるかは不明である。竪穴状遺構以下は第2トレンチ(丘陵先端の平坦面に設定したトレンチ)で検出した。竪穴状遺構は、地山を一段掘り下げたもので、10m×7m分を検出した。深さは、30～50cmを測る。東側の床面に炭や鍛冶滓が散乱しており、作業場のような空間であったと考えられる。竪穴状遺構の内部で井戸と土坑1基を検出した。井戸は、約1.5m×約1.1mの楕円形素掘り井戸で、深さは約1.8mを測る。底から糸切り底をもつ須恵器碗と木筒状木製品が出土した。木筒状木製品には墨痕は認められなかった。鍛冶関連土坑は、竪穴状遺構の外側で確認した。円形で、直径60～80cmを測り、壁が直角気味に立ち上がるものとすり鉢状のものがある。埋土は、粘土と炭混じりの粘土が層をなしていた。竪穴状遺構の埋土から鍛冶滓や焼土、炭などが出土したことから、付近で鍛冶が行われたことは確実であり、前述の9基の土坑は、鍛冶炉の下部構造にあたる防湿施設と考えられる。

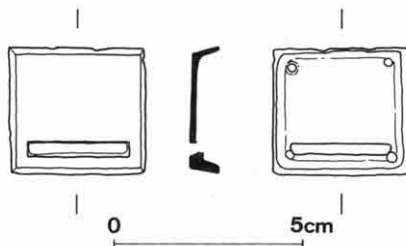
鎌倉時代の遺構には、第2トレンチで検出したピット群がある。トレンチ中央部に2間×2間の掘立柱建物が復原でき、柱穴の一つは竪穴状遺構を切り



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 丘陵部全景



第3図 銅製帯金具実測図(1/2)

込んでいる。柱間は約2.7mを測る。その他の柱穴から輸入陶磁器や土師器鍋が出土しており、これらの土器の年代から13世紀頃のものと考えられる。

その他、第5トレンチで後世に削平された古墳を1基確認した。付近に石材が散乱していることから横穴式石室墳と考えられる。また、削平された墳丘の表土直下から須恵器杯身が3点出土した。これらは、TK217並行期のものであり、古墳の築造年代を示すと考えられる。

②出土遺物 平安時代の遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器、滑石製石鍋、土錘、帯金具、木筒状木製品がある。これらの遺物は第1トレンチの谷の堆積土から出土した。須恵器には転用硯・円面硯がある。土師器には回転台土師器が多く、墨書土器が含まれる。墨書土器にかかれた文字には、現在判明しているものに「山田」が2点ある。

輸入陶磁器には、越州窯青磁と邢窯の白磁があり、邢窯系の白磁は丹後地域では初めての出土である。帯金具は銅製黒漆塗りの巡方である。これらの特殊な遺物の出土とあわせて緑釉陶器の量が多いことは、遺跡の性格を考える上で非常に興味深い。また、鍛冶関連の遺物にるつぼの破片や鍛冶滓がある。これらの遺物の時期は8世紀後半から10世紀後半である。

鎌倉時代の遺物には、土師器、黒色土器、東播系須恵器、輸入陶磁器、漆器碗がある。

まとめ 今回の調査では、平安時代の遺構・遺物について大きな成果が得られた。遺構については、大きな建物跡などはなかったが、作業場と考えられる竪穴状遺構とそれに伴う井戸と土坑、鍛冶炉などの鍛冶関連遺構を確認した。鍛冶滓やるつぼの破片が出土していることから、小規模ではあるが、ここで鍛冶が行われていたことは確実であろう。調査地から南東へ約2kmのところにある弥栄町遠所遺跡群やニゴレ遺跡などの古代に製鉄を行った遺跡との関連も検討していく必要がある。また、遺物は前述のように一般集落というよりも官衙の様相が強い。遺跡の北西にある離湖はかつては日本海に通じた潟湖であり、その水際が遺跡のかなり近くまで迫っていた。このことから、横枕遺跡は当時海上陸上交通の要衝にあたり、物資の集積地であったと考えられる。

(松尾史子)

15. 井町^{いまち}古墳群

所在地 竹野郡丹後町徳光小字井町
 調査期間 平成9年10月16日～12月19日
 調査面積 約450m²

はじめに 今回の調査は、府営広域営農団地農道整備事業に伴うもので、京都府丹後土地改良事務所の依頼を受けて実施した。

井町古墳群は、竹野川支流の徳良川に沿って細長く東西に広がる平地部の、西側最奥部丘陵上に位置する。丹後町から網野町に抜ける道路を見下ろす場所にあたる。この古墳群は、3基の古墳からなる。今回は、開発予定地に含まれる古墳2基の調査を行った。

調査概要

①2号墳 2号墳は、尾根の最高所に築かれた1号墳の南西側に隣接して造られており、その境には幅約2mの溝が直線的に掘られている。一辺12m前後の方墳と考えられる。墳丘は、ほぼ全体を地山の岩盤を削り出して築造しているが、南側にはわずかに盛り土がみとめられる。この古墳には、3基の埋葬主体部が設けられている。いずれも、木棺直葬である。主体部の主軸は尾根筋に直交しており、ほぼ東西方向である。

a. 第1主体部 墳丘中央部やや北寄りに設けられている。長さ約4m・幅約2.4mの長方形墓壇である。この墓壇のほぼ中央部に、長さ約3.4m・幅約0.6mの棺を埋納する。棺内の遺体を安置したとみられる部分には、赤色顔料が残る。副葬品は出土していない。

b. 第2主体部 墳丘北西部に設けられている。長さ約2.5m・幅約1.5mの長方形墓壇である。内部に長さ約1.8m・幅約0.6mの棺を納めていたとみられる。棺内から副葬品は出土していないが、墓壇の埋土から古墳時代前期布留式併行期の土師器甕片が出土している。

c. 第3主体部 墳丘中央部南寄りに設けられている。長さ約5.4m・幅約4mの大きな長方形墓壇である。墓壇北辺を第1主体部に削り取られており、第1主体部に先行するものであ



第1図 調査地位置図(1/50,000)

る。この墓壙中央南寄りに、長さ約4 m・幅約0.8mの棺を埋納する。棺のほぼ中央北辺寄りから鉄製の剣と鉈が出土した。切先は西に向く。

②3号墳 2号墳南西側の急傾斜の尾根上に位置する。2号墳とは約6 mの高低差があり、約12m離れている。この古墳は、尾根の稜線を約8 m×約4.5mの半円形テラス状に削り出して造成されている。

このテラスの南寄りに、長さ約3 m・幅約1 mの埋葬主体部が設けられている。木棺直葬で、主軸はほぼ東西方向である。内部に、長さ約2.3m・幅約0.5mの棺を埋納する。副葬品は出土していない。また、テラス北側で、直径約1.2mの円形土坑を検出した。内部には、炭混じりの土が堆積していたが、出土遺物はない。そのため、この土坑の時期・性格などは、不明である。

まとめ 今回調査した井町古墳群がある地域は、水系的には竹野川流域に属する。本流の竹野川河口周辺には、神明山古墳や黒部銚子山古墳などの日本海側でも有数の大規模な前方後円墳があることは、よく知られている。これらの大規模古墳は、古墳時代前期末から中期初頭頃に築造されたと考えられており、その頃の丹後地域の隆盛がうかがわれる。今回調査した井町古墳群は、2号墳第2主体部埋土出土の土師器甕片からみて、古墳時代前期の4世紀後半頃の築造と考えられる。位置的には、竹野川支流の徳良川流域になる。このような状況から、この古墳群は、竹野川本流域に大規模古墳を築造した支配者に従属する、小地域の有力者の墓とも考えられる。

徳良川流域には、金銅装双龍環頭大刀が出土した高山古墳群や、石垣状の列石をもつ上野古墳群などがあるが、いずれも古墳時代後期～終末期にかけてのものである。井町古墳群は、この地域ではじめて確認した前期古墳であり、この地域や丹後地域の古墳時代を考えるうえで、重要な遺跡といえよう。

(引原茂治)



第2図 井町2号墳(北から)

16. 茶カス古墳群

所在地 竹野郡弥栄町字吉沢
 調査期間 平成9年9月19日～12月5日
 調査面積 約570m²

はじめに 今回の調査は、丹後国営農地(東部地区)開発事業に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。茶カス古墳群は、吉沢地区の丘陵北側の小支丘上に群列し、調査対象の9・10号墳は標高120m前後の尾根上に立地する。これらの古墳は、すでに分布調査時に地表の高まりが確認されており、墳丘の規模、形状などが観察されている。

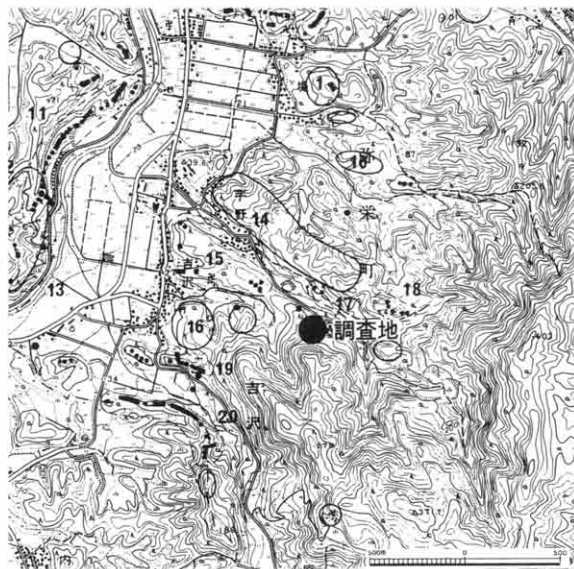
今回の調査では、9・10号墳のほか、新たに11号墳を発見した。また、古墳に関連する土壇1基、中世墓を検出した。

調査概要 調査前の9・10号墳は、直径約10m・約6m、高さ1～2mの円墳と推定されていたが、地形測量では10号墳は方墳であろうと思われた。

9号墳 直径約11m・高さ約1.7mを測る円墳である。墳丘の下半部は、地山を削り出し、裾部を整形する。墳丘の上半部盛り土で、旧表土より上位に灰色土、赤褐色、黄色土などを5～10cm単位で積みあげている。旧表土(暗黒褐色土)は、墳丘平坦面に5～10cmの厚みで堆積しており、注目すべきは東側だけは斜面から裾部まで広がり土壇の底に及ぶ。この層から布留式土器が出土した。

主体部としては、墳丘やや北側で墓壇2基を検出した。いずれも東西方向に主軸を持つ木棺直葬墓である。北の主体部は、墓壇長約2.6m・木棺長約2.4m・幅約0.4mを測る。棺内には、地山を掘り残して仕切り板を設け木口とした。南の主体部は、墓壇長約2.7m・木棺長約1.7m・幅約0.5mを測る。棺内は、北主体部と同様仕切りの痕跡があり、箱形木棺である。出土遺物はないが、土層の観察結果から南の主体部が新しいと思われる。

10号墳 墳丘は、西・南側斜面の地山の削り出しの形状から方墳と判断される。規模は一辺約9mを測る。遺物は、墳丘南西隅から布留式土器が出土した。主体部は、墳丘やや北よりで検出した。墓壇長約2.7m・幅約1.3m、木棺長約2m・幅約0.5mを測る。棺内



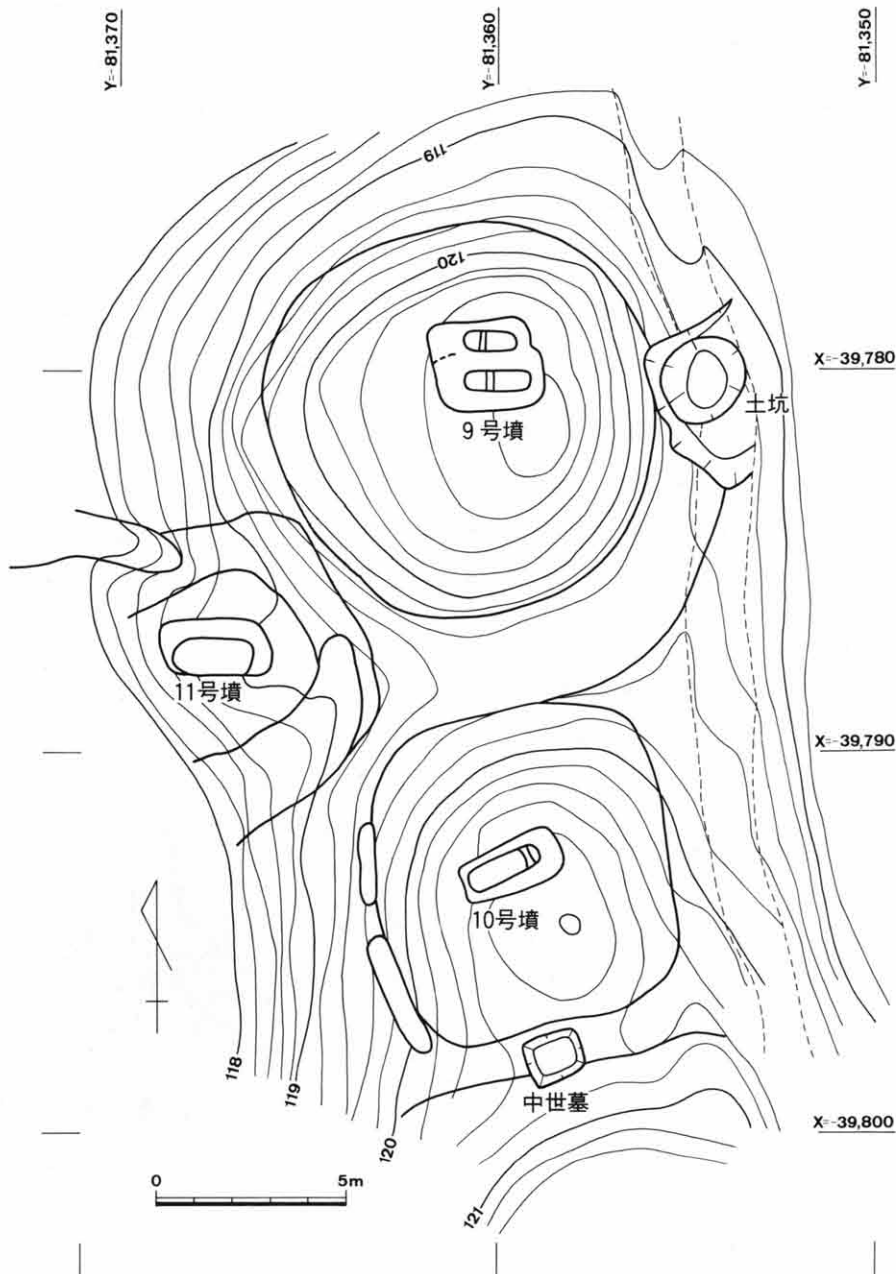
第1図 調査地位置図

には、9号墳の主体部と同じく地山を掘り残した仕切りがあり、箱形木棺である。

11号墳 墳丘は9・10号墳の西斜面の一部を削り築造された一辺約5mを測る方墳である。遺物は、南側の周溝から土師器甕が出土した。主体部は主軸を東西に向く。墓壙長約3m・幅約1.4m、木棺長約1.8m・幅約0.7mを測る。

まとめ 今回の調査では、3基の古墳は木棺直葬墓である。9・10号墳は古墳時代前期、11号墳は中期の古墳である。9・10号墳は、墳丘に盛り土が行われており、とりわけ9号墳ではその築造方法が鮮明にわかった。

(竹井治雄)



第2図 遺構配置図

17. 鳥谷古墳群

所在地 北桑田郡京北町字下中小字鳥谷
 調査期間 平成9年11月5日～平成10年1月14日
 調査面積 約300m²

はじめに 鳥谷古墳群は、古墳時代後期の群集墳で、上桂川の支流で周山盆地を南北に流れる弓削川の西に広がる丘陵地に分布する。今回の調査は、一般地方道佐々江下中線の道路拡幅工事が予定されたことから、これに先立ち京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査は、拡幅予定地内に所在が明らかとなっている4号墳の規模・構造などの確認・記録、及び他の古墳、遺構の有無を確認することを目的として行った。また、4号墳の西北に隣接する3号墳の南側墳丘裾部の一部も今回の工事予定地に含まれるため、工事予定地内に限って調査を実施した。

調査概要 鳥谷4号墳は、墳丘の葺石などは検出されなかったが、推定直径約12mのほぼ円形の墳丘を持ち、内部に開口部から奥壁まで約5m、側壁間の幅約0.9mの無袖式の横穴式石室が構築されていた。調査前の状況から、以前に墳丘頂上部から盗掘を受けていることがわかるが、石室下部の状況は予想以上に残りのよいものであった。

石室は、南東側に開口し、長さ約0.7～1m・幅約0.2～0.3mの自然石を横に寝かしその上に側壁を積み上げており、また開口部では意識的に石材を立てている状況が検出された。今回の調査では、奥壁及び側壁は二段分を検出したのみであるが、墳丘盛り土の堆積状況などから、築造当初は、さらにこの石が積み上げられており、計三段ないし四段ほどの高さを持つものであったと想像される。また、床面には10～15cmほどの割り石が敷き詰められていた。棺を置いた痕跡はなく、玄室部と羨道部の境もはっきりしなかったが、石室の中央部のやや開口部寄りには、掘削時に比較的遊離した石の多いところがあったことから、これらの石は、玄室部と羨道部とを区画し閉塞するものであった可能性がある。また、床石の下層には、中央部のやや開口部寄りで約1mにわたって、厚さ約10cm・長さ約20cmの板状の石材を側壁と平行に二列立てて並べた幅約15cmの溝が造られており、さらに奥壁側約3m



調査地位置図(1/50,000)



鳥谷4号墳出土三足壺

と開口部側約1mには砂層の堆積が見られたことから、排水のための設備が構築されていたことがわかる。

石を敷いた床面の直上からは、いくつかの副葬品が出土した。副葬品の内訳は、金環2点、大小の鉄刀類計4本、須恵器の杯身・杯蓋・平瓶・甕・三足壺など合計21点である。このうち金環と鉄刀1本は、奥壁近くの遺体の頭部が置かれたと推定されるところで検出したが、その他は開口部側で検出した。今回出土した三足壺は、日本全国でこれまでに十数例しか出土例のないもので、京都府内で完形での出土は初めてである。また、杯蓋の2点には、表側に朱で「凹」字状の符号らしき

ものが同じように描かれていた。

4号墳から北西約11mのところに隣接する3号墳の南側の墳丘裾部の一部についても発掘調査を行ったところ、ほぼ現斜面に平行して東西に並ぶ石列を長さ約6.5mにわたって検出した。土器などの遺物は1点も出土しなかったが、断面観察から3号墳の墳丘の直上に並んでいることから、この石列は3号墳の外護列石と推定される。

今回は、4号墳から東側の道路拡幅予定地でも発掘調査を行ったが、古墳の痕跡は認められなかった。ほとんどのところで表土の下に約30~50cmの厚さに黒色土が堆積しており、さらにその下層は黄色の山土となっていた。しかし、調査地の東端で、表土と黒色土の間から弥生時代の土器の破片が出土し、あわせて幅約1.5m・長さ約3m・深さ0.8mほどの溝状の落ち込みを検出した。これらの性格は現時点では不明だが、調査地から数百m東の上中遺跡では弥生時代の住居跡なども検出されていることから、何らかの関連があるのかもしれない。

まとめ 今回の調査によって、鳥谷4号墳は無袖式の横穴式石室を内部主体とする円墳で、出土した須恵器などから、7世紀前半の古墳時代後期末の古墳であることが確認された。また、今回出土した三足壺は、渡来系氏族との関わりも推定され、被葬者の性格を考える上で興味深い資料であるといえる。3号墳は、現時点では規模や内部主体の状況などは不明であるが、東西にまっすぐに外護列石が並んでいるところから、方墳である可能性がある。さらに調査地の東端で弥生土器が出土したことから、この地域周辺では弥生時代から何らかの営みがあったことが推測される。

(竹下士郎)

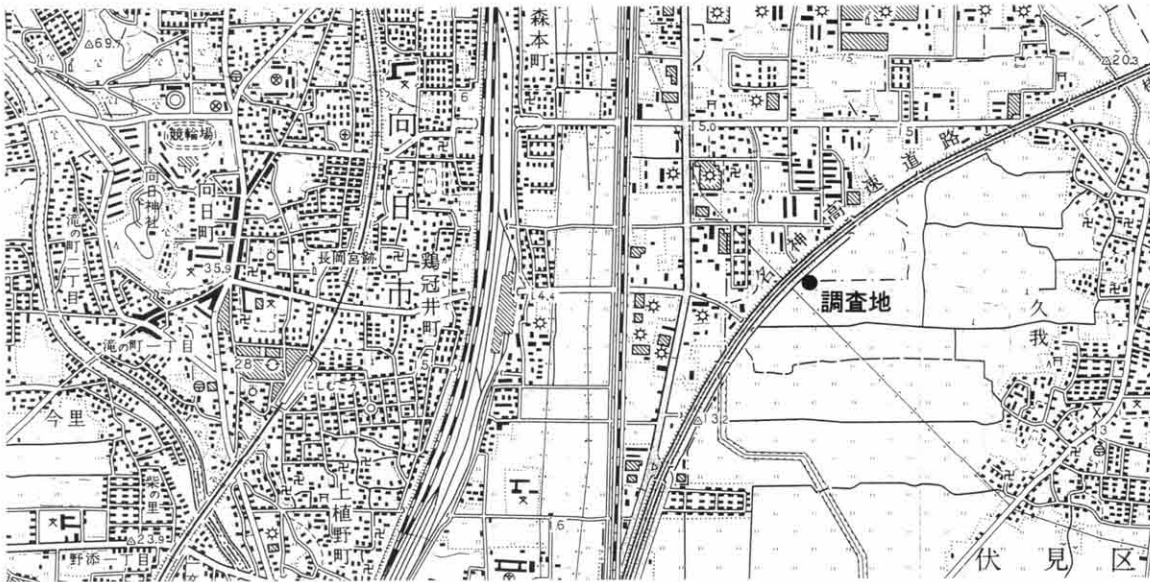
資料紹介

長岡京出土の古櫃について

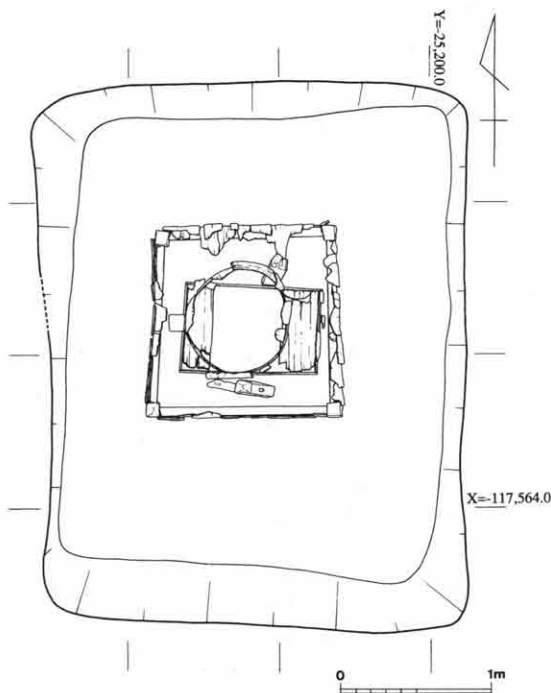
野島 永

今回紹介する櫃は、平成9年度名神高速道路(中央自動車道西宮線)桂川パーキングエリア建設予定地内の発掘調査(長岡京跡左京第399次調査)によって出土したものである。調査地は、京都市南区東土川町正登にあり(第1図)、長岡京条坊復原案によれば、東三坊大路の東側、二条条間大路とその南北両側の宅地(二条四坊二町と二条四坊三町)にあたる。櫃は、長岡京^(注1)廃都後の9世紀後葉に開穿された井戸S E 399412に水溜として転用されていたものである。

井戸S E 399412は、長岡京二条四坊三町の北西隅に位置しており、南北3.6m・東西2.8mほどの長方形の掘形を持つ(第2図)。深さは検出面から約1.5mで、その中央やや北側から、井戸側・井筒・水溜が出土した。井戸側は、縦板組隅柱横棧どめ型式のもので、一辺が1.3m内外の規模を持つ(第3図)。縦板材は、1.5~2cm内外の薄いものであるが、隙間なく並べられており、2つの縦板の間にさらにもう一枚の縦板を外側から被せるように丁寧に重ね合わされていた。また、隅柱や横棧も建築部材などを転用した形跡はなく、横棧の柄組も精巧なものである。井戸内部には、井筒・水溜として転用された円形曲物の側板と、底板と蓋を取り去った櫃が置かれていた。円形曲物は櫃の上に置かれており、曲物の置かれた部分以外は薄板材で覆われていた。櫃内での湧水を円形曲物に誘導させるためであろう。櫃の内部には、水甕として使用されたと思われる



第1図 長岡京跡左京第399次調査地位置図



第2図 井戸 S E 399421 平面図

る大甕の破片が敷かれており、湧水時に泥土の混入を防ぐ工夫を施していたとみられる。なお、曲物の北・西・南側には、井戸側隅柱よりやや大きな角材を打ち込んでおり、それによって、曲物を固定していたように見られる。井戸側の木組に比べれば、井戸内の水溜施設が案外、無造作であることから、曲物・櫃は当初の設備ではないと考えられる。おそらく、井戸内に土砂が埋没したため、再度掘削して新しく水溜の櫃と曲物を設置したものと推測することができる。しかし、土層の堆積状況からは、再掘削の痕跡を確認することはできなかった。井戸掘形から9世紀後葉以前の土師器・須恵器・緑釉陶器などがみられ、曲物内からは、K90型式の灰釉陶器や10

世紀初頭の土師器皿、桃核などが出土した。比較的短期間に埋没したとみられる。

櫃は、前述したように、蓋と底板が取り外されており、4面の側板のみであった。スギの板目材を使用しており、特に長側板の表面の板目文様が美しい。四隅で5枚組に組み合わされており、組手の柄部には2つの木製目釘が打たれるが、腐朽が著しく、飾鋸も遺存しない。黒漆によるかげきり蔭切が側板組手の稜角に幅狭く施されている。以下に各板材の状況について述べる。

東側短側板(第4図1・写真(1)右上) 長さ55.2cm・高さ42.8cm・厚さ1.6cm前後。表面からみて、左上の一隅が欠損する。また、右側組手の柄部の腐朽が著しい。蔭切の漆の痕跡は比較的明瞭ではあるが、表裏面の腐朽のため、加工痕跡はほとんどみられない。わずかに表面右下部分に水平方向の鉋による削り痕がみられる。下端面の釘孔痕跡は、腐朽のため確認できない。

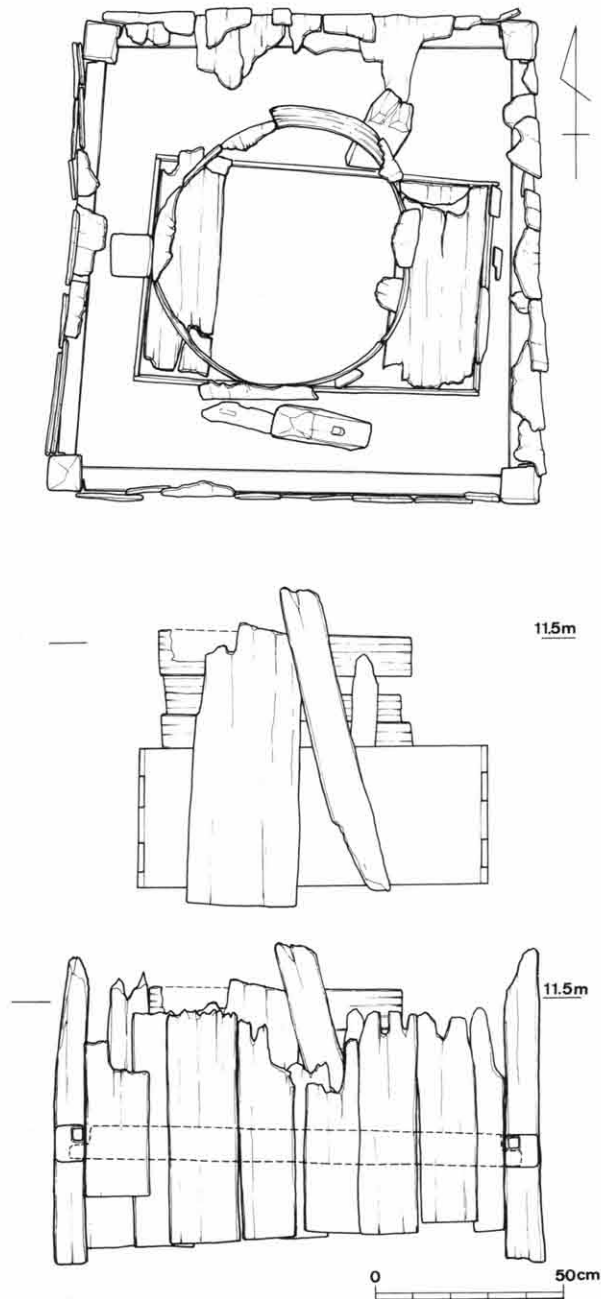
西側短側板(第4図2・写真(1)右下) 長さ55.4cm・高さ42.2cm・厚さ1.5cm前後。ほぼ完存している。表面の左右端には、蔭切が明瞭に残るが、左側の蔭切は幅2.4cm前後、右側の蔭切は幅2.8cmと若干相違がある。左側に組み合わせる北側長側板の厚さが1.7cm前後であるのに対して、右側に組み合わせられる南側長側板の厚さは1.2cm程しかない。そのため、西側短側板の左側組手の柄部の出も1.5~1.6cm、右側組手では、1.3~1.4cmとなっている。つまり、板材の厚さの差による左右不对称感を視覚的に解消するための工夫として蔭切の幅を意識的に増減させたものとみられる。表面には鉋による水平方向の削り痕が明瞭に看取される。『春日権現験記絵巻』などにみられる木工作業のように手斧ではつた跡を鉋で仕上げたのであろう。下端面には、5つの釘孔がある。左側に近接して2つ穿たれたものは3.5mm×3mm程の長方形、右側にも同様に2つ穿たれ、3.0mm×2.5mm程の長方形の釘孔痕跡が認められる。中央に遺存する釘孔は、板材の腐朽により、不明瞭であるが正方形に近いものであったようにみられる。

北側長側板(第4図3・写真(1)左上) 長さ90.2cm・高さ43.6cm・厚さ1.7cm前後。ほぼ完存。蔭切は2cm前後と他よりも短くなる。上半中央に鑲子の弦を通すための壺金具をとりつけた長方形の孔がある。孔は横2.3cm・縦0.7cm前後で、その回りに長さ3.6cm・高さ1.8cmの方形座金をとりつけた圧痕が認められる。表面は右上がり方向の鉋の削り痕が認められるが、それほど顕著ではない。下端面には底板を打ちつけた釘が左右に遺存している。どちらも断面が5.0cm×4.5cm前後の正方形に近い隅丸長方形の角釘である。

南側長側板(第4図4・写真(1)左下) 長さ90.1cm・高さ(残存長)36.6cm・厚さ1.1~1.6cm前後。下端部欠損。蔭切は右側では明瞭ではないが、左側では3.0cm前後の幅となる。上半部左右に1つずつ、蓋と連繋するための壺金具をとりつけたと思われる円形の孔がみられる。しかし座金や裏面の釘隠しの痕跡は認められなかった。表面の中央部分から左上にかけて僅かながら水平方向の鉋の削り痕が認められる。下端部が欠損しているため、底板との接合状況が不明である。

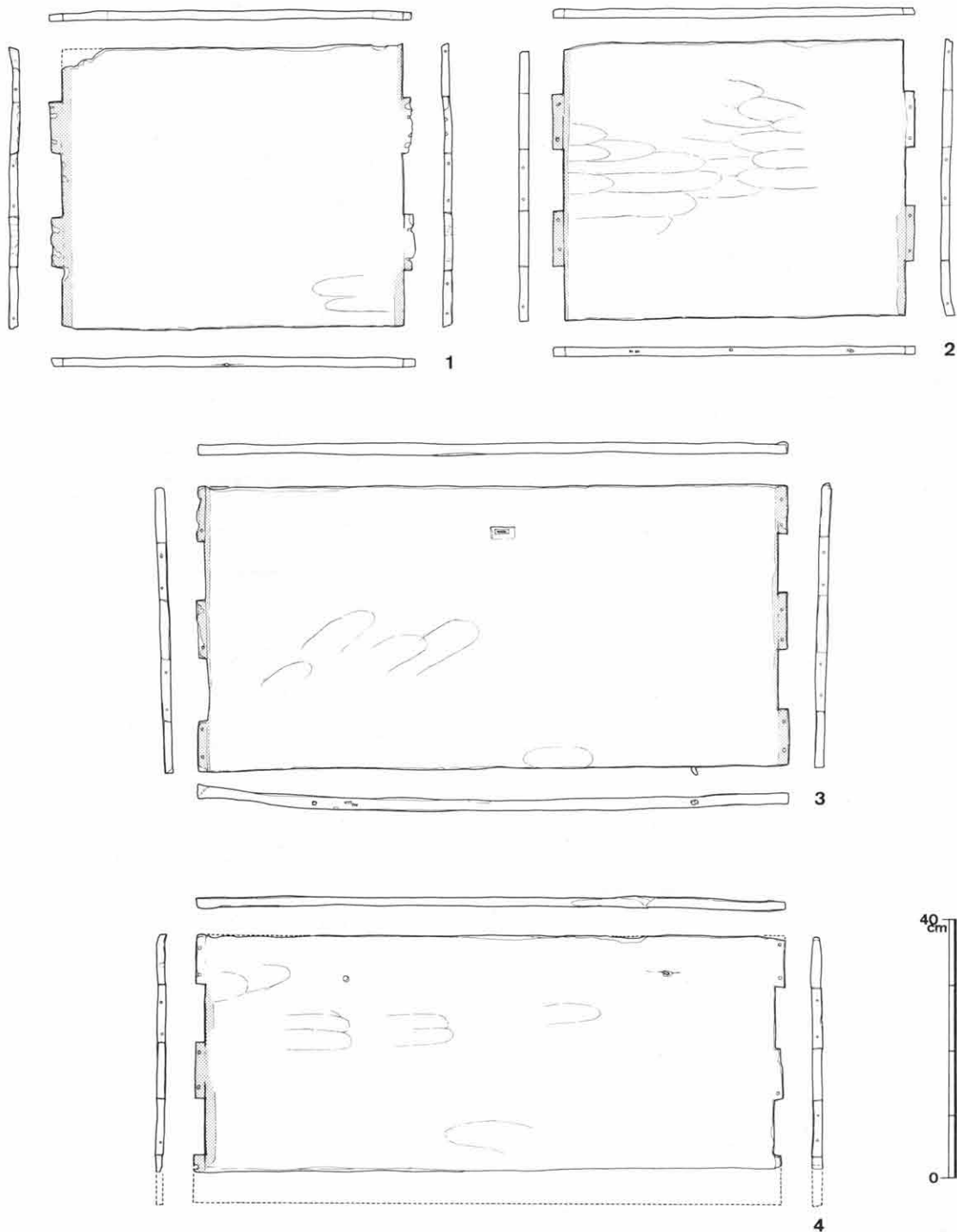
以上、出土した各側板材を概観した。とり去られた蓋は壺金具の孔の位置が上端から5.0~6.0cmであることから、甲板の厚さ推定1.5cmを加算し、壺金具の連繋部を差し引けば、おおよそ、高さ6~7cm前後の被せ蓋造りとなる。四隅の組手はおそらく2枚組で、身同様蔭切が施されてあったであろう。また、底板は側板の下端面を覆う平底造りで、長側の左右に2隻、短側の中央に1隻、計6隻の角釘が打ちつけられていたとみられる。ただし、西側短側板の下端面には、他に小さな長方形の釘孔が2つずつみられたことから、底板の破損・脱落に伴い、修繕が行なわれた可能性がある。正倉院藏品と比べれば、長側と短側の比率はあまり変わらないが、長・短側長に対する深さの比率が最も大きい部類に入る。つまり平面規模からすれば、深い櫃の部類に入るとみて良いであろう(第5図)。

さて、古代の櫃は正倉院藏品のほか、大



第3図 井戸S E 399421井戸側・井筒・水溜

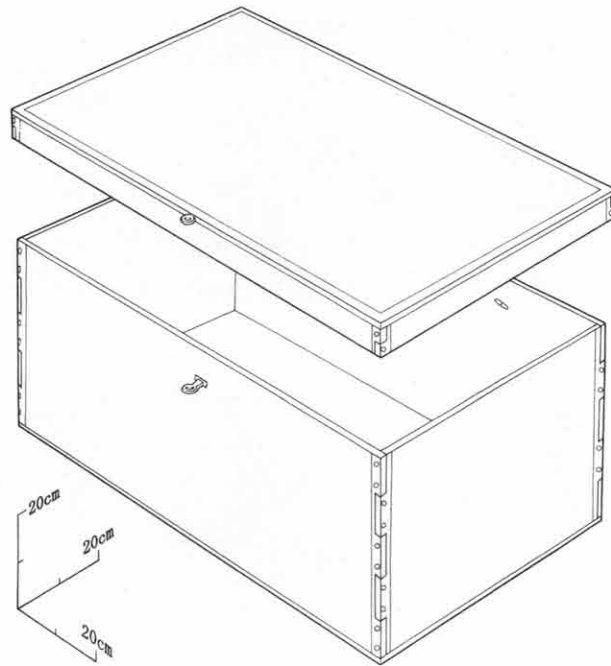
阪府羽曳野市野中寺遺跡^(注2) (7世紀中葉)・奈良県天理市武蔵遺跡^(注3)・京都府相楽郡木津町瓦谷遺跡^(注4) (奈良時代)・京都府向日市長岡京跡左京第13次調査^(注5) (長岡京期)などで出土している。長岡京跡左京第13次調査出土例は、型的には最も新出の刳形を作る韓(辛)櫃の脚である。他の野中寺・武蔵・瓦谷の各例はすべて、白木(素木)造で四脚が付設せず、長側に横棧の取り付けくもので、いわゆる「倭櫃」とされるものである。関根真隆氏の論考^(注6)に詳しいように「倭櫃」という語句は、法



第4図 櫃実測図

1. 東側短側板 2. 西側短側板 3. 北側長側板 4. 南側長側板

隆寺資財帳に1例みえるのみで、他には見あたらないことから、正倉院蔵品を含め、出土例が増加している白木横棧形式の櫃が、当時「倭櫃」と呼び慣わされたとは言いがたい。むしろ、白木造で四脚をもたない櫃の呼称は、しばしば足別机(榻足机)と付記される「明櫃」であったかと思われる。「明」は漆塗に対する白木造の淡紅色の木肌を指している。正倉院文書などには「明櫃」の記載が100例以上頻出することから、一般的に使用されていた櫃の主要形式と考えられる。正倉院蔵品における白木横棧形式の櫃の類例の多さや出土状況とも合致する。



第5図 櫃復原想定図

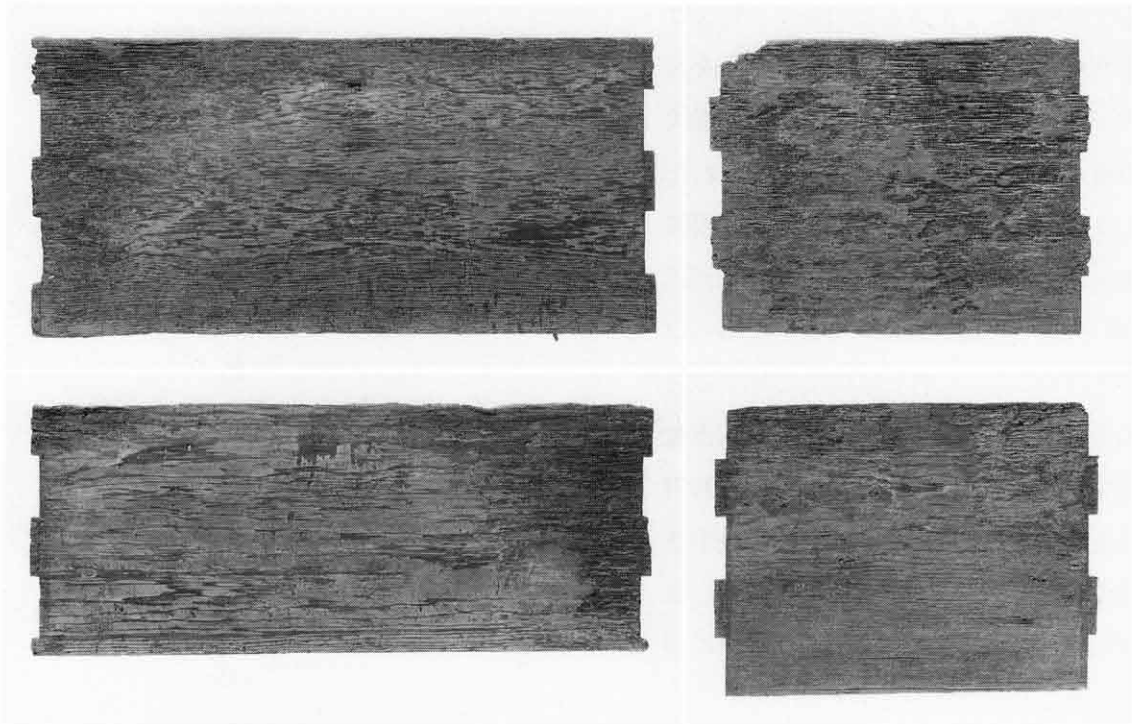
今回出土した櫃は、白木造りではあるが、横棧を持たず、鏝子を取り付く特徴がある。前述の「明櫃」には「鏝子」の付記例がみられないことから、鏝子の付属する例は多くはなかったとみられること、また、延喜主計式凡左右京条にみる「明櫃」の記載寸法がこの櫃とは一致しない点などから、今回の櫃は、「明櫃」とされたものの範疇には入らない可能性がある。時期は下るものではあるが、鏝子以外、特に付属物のない外見上からは、奈良朝文献中、単に「櫃」と記されるものの中に含まれたのではなかろうか。

古代の櫃は、正倉院宝物以外には類例が非常に少ないものである。今回紹介した櫃は、奈良朝における漆塗四脚形式の韓(辛)櫃や白木横棧形式のいわゆる「倭櫃」、あるいは中世絵巻にみられる四脚あるいは、六脚形式の唐櫃などとは異なる。いわば、白木箱櫃形式とでもしうるものであり、9世紀後葉前後における新資料として紹介した。

なお、資料紹介にあたって、鶴見泰寿氏には、関連資料についてご教示頂いた。また、堀大輔氏には、復原図作成に御協力頂いた。記して感謝したい。

(のじま・ひさし=当センター調査第2課調査第4係調査員)

- 注1 条坊路及び町名については、山中 章による条坊復原案とその呼称に従う(山中 章「古代条坊制論」(『考古学研究』第38巻第4号) 1992)。
- 注2 羽曳野市教育委員会『野々上遺跡』パンフレット 1996
- 注3 西藤清秀「天理市武蔵町武蔵遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1996年度』 奈良県立橿原考古学研究所) 1997
- 注4 伊賀高弘「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要(2)瓦谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第32冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注5 高橋美久二・山中 章ほか「長岡京跡左京第13次(7ANESH地区)発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第4集 向日市教育委員会) 1978
- 注6 関根真隆「正倉院古櫃考」(正倉院事務所・後藤四郎編『正倉院の木工』 日本経済新聞社) 1978



写真(1) 櫃側板

右上：第4図1 右下：同図2 左上：同図3 左下：同図4



写真(2) 櫃出土状況(北西から)

誌上遺物展示

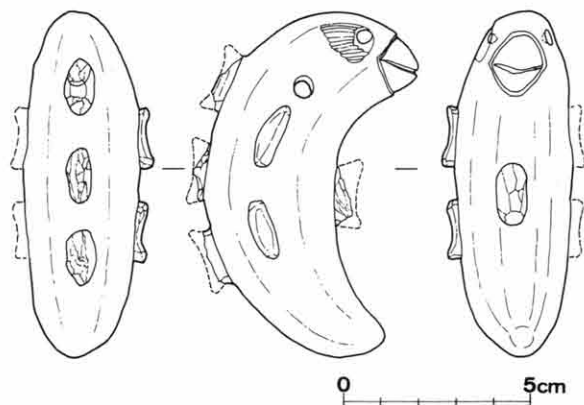
4. 京都府向日市山開^{やまびらき}古墳の子持勾玉

概要 17世紀後半の「石之長者」木内石亭は、勾玉・独鈷石・石冠などの考古資料、アケボノゾウなどの化石類、紫水晶や石灰華などの鉱物資料を「奇石」として広く収集し、この奇石の研究をライフワークとした文化人であった。彼の代表的著作の一つ、『雲根志』には挿図及び附録図として「神代石」が列挙されているが、その中に「石鋸頭」とされたものが、ここで取り上げる子持勾玉である。さらに、18世紀前半に長崎オランダ商館医師として日本に滞在した、シーボルトの大著、『日本』の図版では、子持勾玉が管玉・勾玉などと一緒に装身具として構成されている。現在の考古学では、これは一種の祭祀遺物として見解の一致をみているが、ではどのように使用されたかについては、実のところ、江戸時代の認識からさほど変わっていない。

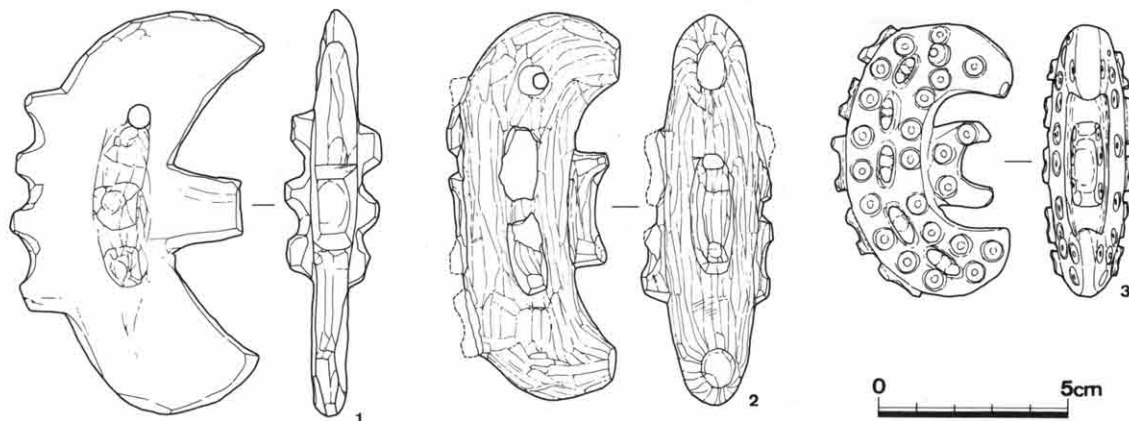
子持勾玉とは、通有の勾玉の外側、側面、内面に突起を持つもので、一般に主たる勾玉を親玉、それぞれの突起を子玉と称する。この遺物の意味や性格付けについては多くの見解があり、魚・鳥の形象とみる説、玉を多く付けて呪力の増幅を祈願したとする説などがある。さらに、子持勾玉は全国で300点以上が知られているが、単独出土が多く、形態的变化も大きいため編年的位置付けが困難な、いわば謎の遺物であった。その中で、山開古墳の子持勾玉は、遺構・遺物の共伴関係が明確であり、現在では最古の子持勾玉と見なし得る資料である。

山開古墳は、向日市森本町山開に所在し、長岡宮跡の発掘調査によって検出された円墳である。墳丘自体は完全に削平されていたが、古墳の南半部に当たる周溝が検出され、南側幅8m・東側幅3m・深さ0.6mが遺存していた。古墳の直径は22.5mを測る。周溝のほぼ中央に径1m前後の石敷遺構があり、そこからTK73型式の須恵器杯身と子持勾玉とが出土した。この子持勾玉は、親玉の湾曲が小さく、長さ9.3cm・幅3.5cm・厚さ3.1cmを測る。素材は、暗緑色～灰褐色の蛇紋岩を使用する。表面には刀子による密な削り痕が残り、砥石で仕上げたらしい細かい擦痕が認められる。親玉の両端は尖っておわるが孔のある側には目とくちばしを表現している。子玉は、腹部に1個、背部に3個、両側面に各2個を配するが、一方の側面は欠失している。

意義 子持勾玉の謎を解き明かすために、出土状況から性格付けを試みてみよう。子持



第1図 山開古墳出土子持勾玉実測図



第2図 子持勾玉の各型式

1. 西日本型(奈良県桜井市三輪山麓) 2. 上野型(群馬県群馬町三ツ寺I遺跡) 3. 日本海型(石川県富来町高田遺跡)

勾玉は、単独出土を除けば、古墳副葬例、住居跡検出例が全体の1割に満たず、集落内の祭場的な遺構、溝中に意図的に廃棄された土器群に混じって出土する例が大半である。したがって、子持勾玉は古墳＝首長のマツリ、あるいは住居内＝家族のマツリで使用されたものではなく、集落の成員による共同体的なマツリに供された可能性が見えてくる。ただし、福岡県沖ノ島祭祀遺跡でも子持勾玉が出土しており、その祭祀が玄界灘の渡航の国家的マツリであれば、畿内政権による子持勾玉を使用したマツリの執行も考えられる。しかし、福岡市から宗像郡にかけての沿岸部では滑石を使用した白玉製作遺跡が知られており、北部九州を中心とした地域で子持勾玉が製作・使用された可能性もある。これは、畿内から古墳のマツリの伝播によって移植される、刀子・斧・鎌などの石製模造品とは対照的である。子持勾玉は石製祭器の一種であるけれども、地域ごとに集落のマツリのために製作・使用された場合が多かったと思われる。だとすれば、子持勾玉を細かく見ていくことで、地域的なまとまりを抽出することが可能であるに違いない。

例えば、鳥根県松江市金崎1号墳に副葬された子持勾玉は、腹部に「T」字形棒状の装飾を削り出し、側面には「コ」字形の子玉を浮き彫りし、石材も灰白色で黄褐色の小班をもつという特徴的なものである。この型式は、金崎古墳の2点以外に、破片であるが、鳥取県米子市福市遺跡、鳥根県玉湯町出雲玉造遺跡からの出土が知られていて、時期的にも5世紀後半から6世紀初頭におさまる。いわば、出雲型の子持勾玉と言えようか。一方、6世紀の東日本地域でも、上野型とも呼ぶべき特徴的な子持勾玉がある。それは、平面形が「コ」字形を引き伸ばした輪郭で、親玉が丸みを持ち、その両端は切り落とされたような形態を持つ子持勾玉である。上野地域では、5世紀中葉に古墳のマツリにおいて石製模造品の使用が定着し、それが榛名二ツ岳火山灰(F A)降下前後から集落のマツリの祭具として盛行するようになり、豪族居館の一角では、群馬県群馬町三ツ寺I遺跡のような石敷きの祭場を持つ例がある。これら、石製模造品は上野西部に産出する軟質の滑石を素材とし、刀子による削りを多用して作るため、丸みを持った石製模造品が遅くまで残るといった特徴がある。さらに、下野地域や房総地域の子持勾玉も、型式学的なまとまりが指摘でき、それはこれらの地域に玉作り遺跡や石製模造品製作遺跡が知られていることと無関係とはいえないだろう。

以上は、狭い分布圏を有する型式であるのに対し、広い分布の型式もある。伯耆・能登・越中などの日本海側には親玉に円圏文を刻んだ子持勾玉が散見されるが、これらの分布は、朝鮮半島の大韓民国慶尚南道晋州市遺跡例なども視野に入れて検討せねばならないだろう。一方、奈良県桜井市の三輪山麓では15例の子持勾玉の出土があるが、その主体となる型式は、平板状の親玉の両端が尖り、背側と側面の子玉は集中し、腹部の子玉が方形突起へと変化したものである。これは中期末以後、西日本全域に点的に分布し、形態の地域的変異がほとんどない。破片ではあるが、丹後地域の宮津市女布出土の子持勾玉もこの型式である。これは、西日本に広域の祭祀圏が確立したことを示唆するもので、それは、分布の稠密さが示すように、三輪山の神マツリを各地方で実修することを意味するものかもしれない。



山開古墳出土子持勾玉

『日本書紀』崇神天皇7年条及び『古事記』には、茅渟県陶邑(『記』では河内美努村)の大田田根子が呼ばれ、三輪山を祭らしめたとしている。寺沢薫氏によれば、大阪府南部の陶邑古窯址群の周辺では9例の子持勾玉の出土が知られ、三輪山麓の祭祀遺跡でも多くの古式須恵器の出土が見られることから、両者の深い関連を推定する。そして、それは三輪山祭祀の新たな確立を示し、河内政権(茅渟)の政治的伸長を意味するという。子持勾玉と初期須恵器の関連は、子持勾玉のマツリ全てではないけれども、比較的初期の例に属するこの山開古墳例も該当し、しかも、目を表現して何らかの動物を形象したことが明らかである。子持勾玉は、多様なマツリの中で使用された祭具であるけれども、山開古墳の子持勾玉は、動物供犠をとまなう儀礼の中で使用されたものではなかろうか。

(河野一隆)

<参考文献>

1. 平良泰久「長岡宮跡昭和50年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1976)』 京都府教育委員会) 1976
2. 寺沢 薫「三輪山山麓出土の子持勾玉をめぐって」『大神神社境内地発掘調査報告書』 1984
3. 『三ツ寺I遺跡 古墳時代居館の調査』(『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書』第3集 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株式会社) 1988
4. 四柳嘉章「古墳時代の沙庭と祭具—富来町高田遺跡祭祀遺構の一考察—」『北陸の考古学』 1983

府内遺跡紹介

81. ^{いの おか くるま づか} 飯岡車塚古墳

飯岡車塚古墳は、京田辺市飯岡に所在する前方後円墳である。この古墳が存在する飯岡丘陵は、木津川の西岸に接するようにある独立丘陵で、最高所で約67m、南麓からは約34mを測る。丘陵上には、この車塚古墳以外にも、ゴロゴロ山古墳・弥陀山古墳・薬師山古墳・トヅカ古墳(いずれも円墳)などの古墳が存在するだけでなく、飯岡横穴などの横穴墓も存在している。飯岡丘陵は、南山城平野の中央部における前期から後期にかけての古墳群の一つであったことがわかる。

このような飯岡丘陵上の古墳の中であって、今回取り上げる飯岡車塚古墳は、飯岡古墳群の中の唯一の前方後円墳である。規模は、各本によって異なっているが、1920年の『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊では、全長約86.4m、後円部径約57m、後円部高約9m、前方部幅約41mを測るとされる。また、1938年に公表された『日本古文化研究所報告』9に収められた「山城飯岡車塚古墳」によれば、全長約81m、後円部径約57m、後円部高約9m、前方部幅約41mを測るとされている。これは、前方部がすでに茶畑として開墾されたり、後円部が荒地となっていた関係から、正確な値が出しにくかったためと思われる。ちなみに、『前方後円墳集成』では、墳長80~88m、後円径52~56m、後円部高7.5~10m、前方部幅35~50mとなっている。

調査は、1902年に後円部が掘られ、後円部の下約0.9mのところには石室があるのが確認された。石室は竪穴式石室で、割り石が小口積みにされており、全長約2.4m・幅約1.2m・高さ約1.2mという規模である。石室の底部には、砂利と粘土が固めた状態であったようで、粘土床の上に木

棺が安置されたような形態が推測されている。この竪穴式石室から出土した遺物は相当数に昇り、主なものだけでも列挙すると、玉類(勾玉・管玉・小玉)、石製腕飾類(石釧・車輪石)、武器類(刀剣など)がある。

大正年間になり、京都大学の梅原末治が実地調査を行った。そのときの所見が先の『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊に収められた報告で、ここで梅原は、「全山ヲ茸ケル礫石ハ随所ニ存スルモ埴輪圓筒片ハ見當ラズ」と書かれているように、茸石の存在は確認されたが、この時点では円筒埴輪列は見つからなかったようで



第1図 遺跡所在地(1/25,000)

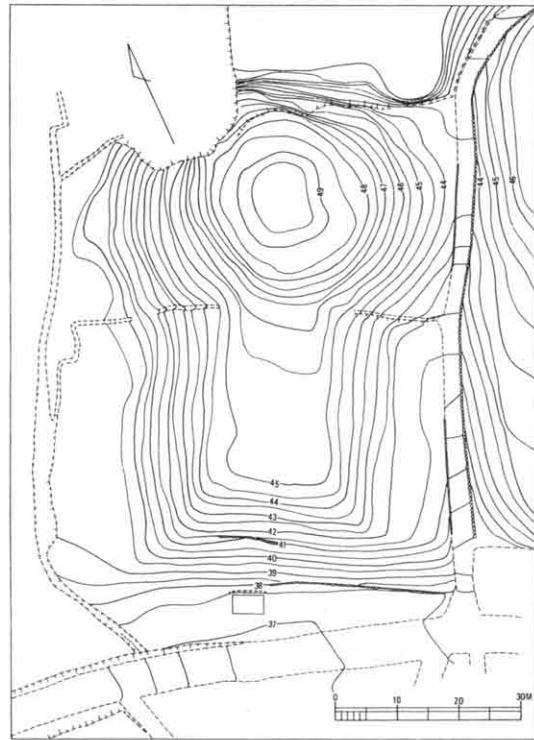
ある。

1971年には、龍谷大学文学部考古学教室が測量調査を実施し、第2図のような詳細な測量図が作成された。この時の測量調査の結果、梅原の報告を確認しただけでなく、竪穴式石室が幅の広い矩形であることから、飯岡車塚古墳を前期古墳でもやや新しい時期、すなわち4世紀後半頃の築造と推定している。

その後、1976年3月になって、この古墳の東側を通る道路の拡張工事が計画されたため、事前に発掘調査が実施された。その結果、墳丘の最下段の葺石が発見されただけでなく、その外側には楕円形の埴輪列がめぐっていたことが初めてわかった。これまでは、円筒埴輪列の存在は全く不明であったのであるが、この時の調査で初めて確認されたのである。

以上の結果のうち、埴輪の年代観という新しい要素を加えることで、この古墳の築造時期をこれまでの4世紀後半から、4世紀末にまで下げて考えられるようになった。飯岡丘陵上には先にも触れたように、いくつかの古墳が存在するが、その中でもこの車塚古墳が最も古く、その後、6世紀後半から末葉にかけて古墳や横穴が築造され続けるのである。この丘陵上に、なぜこのように古墳や横穴などが造営され続けたかは、今後解明すべき課題であろう。

(土橋 誠)



第2図 飯岡車塚古墳測量図
(『南山城の前方後円墳』から転載)

<参考文献>

- 岩井武俊「山城国相楽綴喜両郡の古墳」『考古界』5-1 1905
 梅原末治「飯ノ岡ノ古墳」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊 京都府) 1920
 梅原末治「山城飯岡車塚古墳」(『日本古文化研究所報告』9 日本古文化研究所) 1938
 『田辺町郷土史』古代篇 田辺郷土史会 1959
 「南山城地方踏査報告」その一『第13とれんち』 京都大学考古学研究会 1965
 堀 守「飯岡車塚古墳」(『南山城の前方後円墳』 龍谷大学考古学資料室) 1972
 吉村正親『飯岡車塚古墳発掘調査報告(周溝部調査)』 綴喜古文化研究会 1976
 「飯岡横穴発掘調査報告」付載 飯岡東原古墳の発掘調査」(『田辺町埋蔵文化財調査報告』第1集 田辺町教育委員会) 1980
 「田辺町遺跡分布調査概報」(『田辺町埋蔵文化財調査報告』第3集 田辺町教育委員会) 1982
 『前方後円墳集成』近畿篇 山川出版社 1992

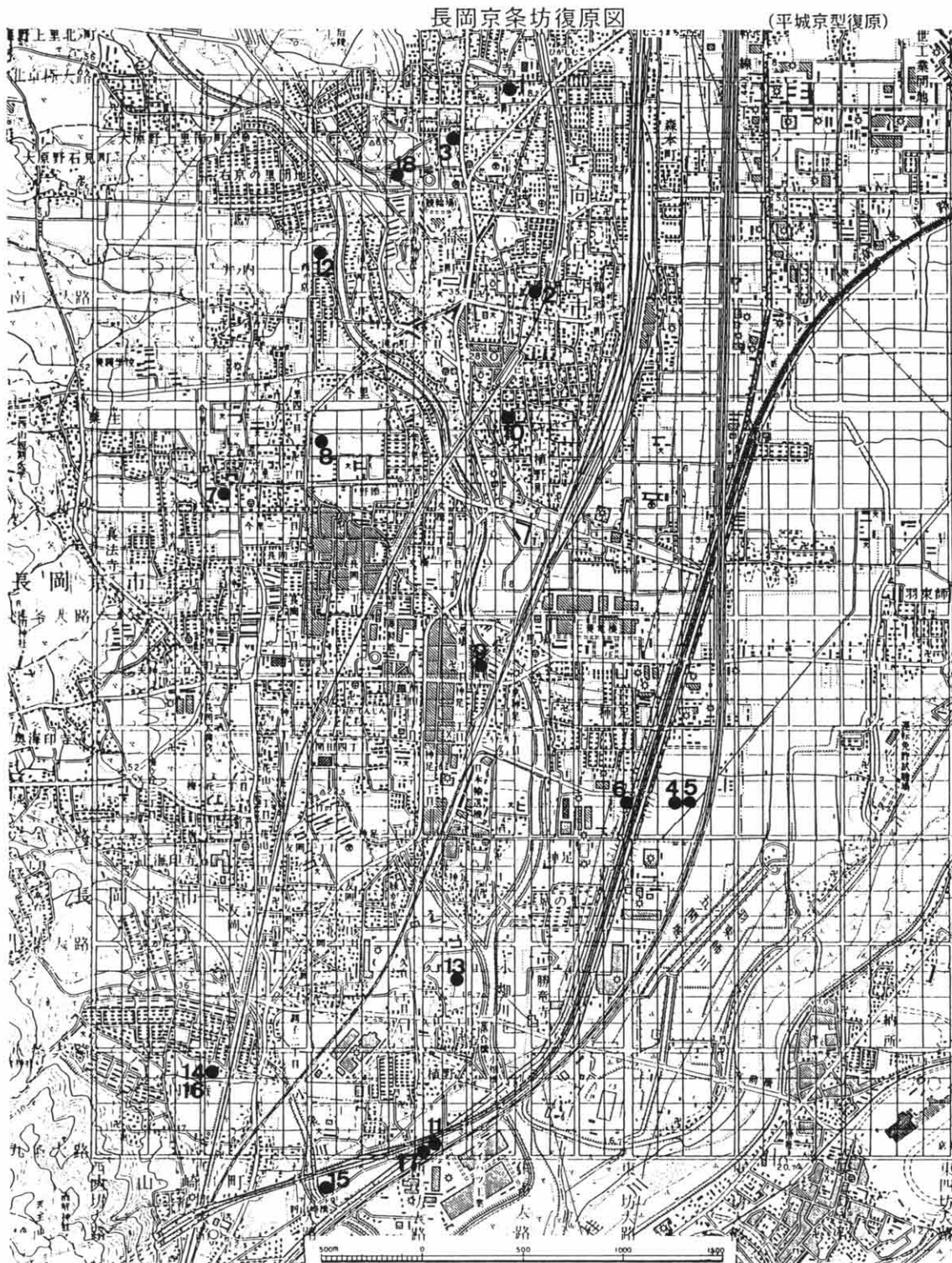
長岡京跡調査だより・64

前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成9年11月26日、12月25日、平成10年1月28日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内3件、左京域3件、右京域12件であった。京外の5件を併せると23件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。このうち、左京第414次の調査結果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1996年1月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第354次	7ANBHD-2	向日市寺戸町初田16-3	(財)向日市埋文	11/4~11/27
2	宮内第355次	7ANEHJ-4	向日市鶏冠井町祓所41-5	(財)向日市埋文	11/18~12/19
3	宮内第356次	7ANBMC-6	向日市寺戸町南垣内45番地	(財)向日市埋文	1/6~2/3
4	左京第407次	7ANMTD-4	長岡京市神足寺田1番地	(財)古代学協会・ 古代学研究所	7/1~
5	左京第414次	7ANMTD-5	長岡京市寺田1-9・1-10・1-13・30- 1-30-2、神足典薬1-5・1-7・1-12	(財)長岡京市埋文	10/1~
6	左京第415次	7ANMMO-7	長岡京市神足麦生4-6他	(財)長岡京市埋文	10/13~10/31
7	右京第580次	7ANINC-8	長岡京市今里五丁目310-2他	(財)長岡京市埋文	9/24~98.1/9
8	右京第582次	7ANISF	長岡京市今里庄ノ測32	(財)長岡京市埋文	10/27~12/26
9	右京第583次	7ANLTD-5	長岡京市馬場一丁目48	(財)長岡京市埋文	11/17~12/10
10	右京第584次	7ANGND-1	長岡京市井ノ内の田21	(財)京都府埋文	12/1~98.1/29
11	右京第585次	7ANTGT-4	大山崎町下植野町五条本	(財)京都府埋文	7/10~8/7
12	右京第586次	7ANFNM-7	向日市上植野町野上山16・16-6・ 16-9他	(財)向日市埋文	11/27~98.1/13
13	右京第587次	7ANQKA-3	長岡京市久貝618他	(財)長岡京市埋文	12/1~98.1/29
14	右京第588次	7ANSYS-2	大山崎町円明寺横林10-1	大山崎町教委	12/16~12/22
15	右京第589次	7ANSKT-3	大山崎町円明寺門田	(財)京都府埋文	9/5~9/26
16	右京第590次	7ANSYS-3	大山崎町円明寺横林10-1	大山崎町教委	1/19~
17	左京第591次	7ANTGT-5	大山崎町下植野五条本9・110・ 10-9・17-14	大山崎町教委	1/27~
18	右京第592次	7ANBNN-2	向日市寺戸町中野16	(財)向日市埋文	1/23~
19	物集女城跡第4次 中海道遺跡第46次	9ZMANY-43・ NNANK-46	向日市物集女町中条10	(財)向日市埋文	10/2~11/7
20	向日市立会第 97139次	7ANFMK	向日市上植野町南開64-4	(財)向日市埋文	11/10
21	山城国府跡第47次	7XYMS'CM	大山崎町大山崎茶屋前3	大山崎町教委	12/1~12/15
22	海印寺跡第4次・ 走田古墳群第3次	7CKPME-4	長岡京市奥海印寺明神前31	(財)長岡京市埋文	12/15~98.1/23
23	大藪遺跡		京都市南区久世殿城町	(財)京都市埋文	12/8~12/25



番号は一覧表・本文 () 内と対応

調査地位置図

左京第414次（5）

（財）長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は、JR長岡京駅の東方に位置する工場跡地で、すぐ東には東海道新幹線が、西には国道171号線と名神高速道路が南北に走る。また、ここは標高11m前後の扇状地で、山城地方最古の弥生時代集落跡である雲宮遺跡の範囲にも含まれる。

調査成果としては、六条条間南小路と東二坊坊間小路、及びその交差点を確認できたことがあげられる。六条条間南小路と東二坊坊間小路は、ともに両側溝の心々間距離が9.6mあまりの規模である。六条条間南小路より以北では、西側の路肩に沿った路面上に南北溝が掘られているため、道路幅は狭くなっている。また、小路どうしの交差方式は、南北道路よりも東西道路を優先させており、西隣りの交差点が南北道路を優先させているのとは異なっていることが確認できた。また、左京六条二坊十一～十四町では、掘立柱建物跡が13棟確認されたほか、井戸も計4基、ほかに土杭や溝なども検出された。これらの掘立柱建物跡には、廂のあるものも見られるが、ほとんど桁行3間×梁間2間程度の小規模なものである。井戸は、すべて方形の縦板組で、井戸側の格式に大きな差はない。特に十二町では、これまでの調査例を含めると井戸が5基確認された。

出土遺物としては、和同開珎、萬年通寶などの銭貨をはじめ、丸靱、銅鈴、銅鏃、飾鋌、分銅などの金属製品が多い。そのうち、飾鋌は櫃など木製の収納容器につけられた金具の一種で、花卉を表現した径約1.6cmの鋌頭をもつ精巧な作りの金属製品である。当時としてはかなりの貴重品と思われる。また、土器溜まりから検出された分銅は半球形で、頂部の鈕は欠けていたが、直径2.3cm・高さ1.5cm・重さ43.39gを測る。

このような点を総合すると、ここは町内を小規模に分割して利用した下級官人クラスの宅地であった可能性が高い。

なお、その他、土器類、瓦類、土製品、木製品、石製品なども多数見られ、時期も中世から弥生時代にまで多岐にわたる。今後の調査研究によって、当時の生活様式などが詳しく浮かび上がってくるとと思われる。

（米本光徳）

センターの動向(9.11~10.1)

1. できごと

11. 5 鳥谷古墳群(京北町)発掘調査開始
生野内城跡(網野町)発掘調査開始
- 6 教員職出向職員研修「泉涌寺ほか」
講師：堤圭三郎理事、米本光徳・古瀬誠三主査調査員、竹下士郎・八木厚之・中村周平調査員受講
- 7 浦入遺跡(舞鶴市)現地説明会
棕ノ木遺跡(精華町)発掘調査終了(5.6~)
- 8~15 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック海外研修「中国湖北省・湖南省・上海市」、伊賀高弘、有井広幸、森島康雄、柴 暁彦調査員参加
- 11 森垣外遺跡(精華町)発掘調査開始
- 13 上田正昭理事、余部遺跡第2次調査(亀岡市)現地視察
- 14 職員研修(於：当センター)講師：山本三郎兵庫県埋蔵文化財調査事務所調査第1班長「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」
- 18~20 京都府職員研修(於：府職員研修所)松尾史子調査員出席
- 19 文化庁岸本直文技官、余部遺跡第2次調査現地視察
- 21 余部遺跡第2次調査現地説明会
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(於：八尾市)杉江昌乃・今村正寿・鍋田幸世主事出席
- 23~24 京都府埋蔵文化財研究会(於：京都会館)
- 25 木村英男常務理事・事務局長、森垣外遺跡現地視察
- 26 長岡京連絡協議会
- 27 茶カス古墳群現地説明会
- 27~28 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：東京都)木村英男常務理事・事務局長、福嶋利範事務局次長、安田正人課長補佐出席
12. 1 長岡京跡右京第584次調査(長岡京市)発掘調査開始
木津城跡・城山遺跡(木津町)発掘調査開始
- 2 木村英男常務理事・事務局長、鳥谷古墳群・余部遺跡第2次調査ほか現地視察
- 3 教員職出向職員研修「平安京」、講師：堤圭三郎理事、米本光徳・古瀬誠三主査調査員、竹下士郎・八木厚之・中村周平調査員受講
川向古墳群(舞鶴市)発掘調査開始
- 11 木村英男常務理事・事務局長、横枕遺跡(網野町)・菩提城跡(弥栄町)現地視察
- 12 横枕遺跡現地説明会
- 15 職員研修(於：当センター)講師：竹原一彦主任調査員「京都府における古墳時代集落の基礎的研究」
- 16 佐山遺跡(久御山町)発掘調査終了(5.27~)
- 17 井町古墳群(丹後町)関係者説明会
生野内城跡発掘調査終了(11.5~)
茶カス古墳群(弥栄町)発掘調査終了(9.18~)
- 18 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブ

- ロックOA委員会(於：奈良市)森島康雄調査員出席
鳥谷古墳群現地説明会
- 19 井町古墳群発掘調査終了(10.16～)
横枕遺跡発掘調査終了(10.7～)
- 22 第51回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事・事務局長、川上 貢、上田正昭、都出比呂志、井上満郎、堤圭三郎、梅野 宏、中谷雅治理事出席
- 24 教員職出向職員研修「文化財保護法」、講師：堤圭三郎理事、米本光徳・古瀬誠三主査調査員、竹下士郎・八木厚之・中村周平調査員受講
- 25 長岡京連絡協議会
1. 9 成勝寺跡(京都市)発掘調査開始
- 13 埋蔵文化財担当職員講習会(於：大阪大学)奥村清一郎・水谷壽克課長補佐出席
- 14 木村英男常務理事・事務局長、浦入遺跡現地視察
- 16 職員研修(於：当センター)講師：伊賀高弘・森島康雄・有井広幸・柴 暁彦調査員「中国海外研修報告」
- 19 下植野南遺跡(大山崎町)発掘調査開始
- 21 教員職出向職員研修「東寺」、講師：堤圭三郎理事、米本光徳・古瀬誠三主査調査員、竹下士郎・八木厚之・中村周平調査員受講
- 22 教育関係法人合同研修会(於：グリーンパルるり溪)木村英男常務理事・事務局長、福嶋利範・安藤信策事務局次長・安田正人課長補佐出席
- 28 天神山古墳群(木津町)発掘調査終了(10.6～)
長岡京連絡協議会
- 29 浅後谷南城跡・浅後谷南遺跡(網野町)現地説明会
(安藤信策)

受贈図書一覧(9.11~10.1)

(財)山形県埋蔵文化財センター	山形県埋蔵文化財センター調査報告書第39集 横軸橋跡・水沢館跡発掘調査報告書、同第40集 野新田遺跡発掘調査報告書、同第41集 富山2遺跡発掘調査報告書、同第42集 土崎遺跡・梵天塚遺跡・中谷地遺跡発掘調査報告書、同第43集 荒川2遺跡発掘調査報告書、同第44集 西町田下遺跡発掘調査報告書、同第45集 木戸下遺跡第2次発掘調査報告書、同第46集 津谷遺跡発掘調査報告書、同第47集 宮下遺跡発掘調査報告書、同第48集 北柳1・2遺跡発掘調査報告書、同第49集 後田遺跡・大道下遺跡第2次発掘調査報告書、同第50集 塔の腰遺跡発掘調査報告書
(財)いわき市教育文化事業団	いわき市埋蔵文化財調査報告第48冊 永田遺跡
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第175集 小島田八日市遺跡、同第205集 上栗須寺前遺跡群Ⅲ、同第206集 黒熊八幡遺跡、同第207集 白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡、同第210集 長根安坪遺跡、同第211集 天引狐崎遺跡Ⅱ、同第213集 多比良追部野遺跡、同第214集 神保植松遺跡、同第215集 緑埜遺跡・緑埜上郷遺跡・竹沼遺跡、同第216集 矢田遺跡Ⅷ、同第219集 白井遺跡群、同第220集 矢田遺跡Ⅶ、同第223集 荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ、同第226集 笄井中屋敷遺跡、出土した古代の土器 展示レポート、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団年報16、研究紀要14
(財)君津都市文化財センター	(財)君津都市文化財センター発掘調査報告書第95集 美生遺跡群Ⅲ、同第127集 上笠上谷遺跡(2)、同第128集 蓮華寺遺跡Ⅲ、同第129集 神納三俣台遺跡、同第130集 亀塚遺跡、同第131集 富津陣屋跡発掘調査報告書、同第132集 中越遺跡、同第133集 富士見台遺跡Ⅵ、同第134集 池ノ谷2号塚、同第135集 外箕輪遺跡Ⅲ、同第136集 根形台遺跡群XⅥ地点、同第137集 谷ノ台遺跡Ⅱ、君津都市文化財センター研究紀要Ⅶ
(財)山武郡市文化財センター	研究ノート山武 創刊号、(財)山武郡市文化財センター発掘調査報告書第31集 大綱山田台遺跡群Ⅲ、同第37集 根本遺跡、同第43集 山田・宝馬古墳群、同第45集 松尾城跡Ⅰ、同第46集 御田台遺跡
(財)東京都教育文化財団 東京都埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター調査報告第45集 多摩ニュータウン遺跡、同第46集 菅原神社台形上遺跡、同第48集 多摩ニュータウン遺跡 先行調査報告7
(財)かながわ考古学財団	かながわ考古学財団調査報告17 宮ヶ瀬遺跡群XⅠ、同26 池子遺跡群Ⅳ、同24 下大槻峯遺跡(No.30)Ⅰ、同25 宮畑(No.34)遺跡・矢頭(No.35)遺跡・大久保(No.36)遺跡、同30 中里遺跡(No.31)・西大竹上原遺跡(No.32)、研究紀要2 かながわの考古学、年報4 平成8年度
(財)横浜市ふるさと歴史財団 富山県埋蔵文化財センター	港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告23 西ノ谷遺跡 縄文のなりわい
(社)石川県埋蔵文化財保存協会	石川県出土文字資料集成
(財)岐阜県文化財保護センター	岐阜県文化財保護センター調査報告書第28集 山手宮前遺跡、同第30集 堀田城之内遺跡、同第31集 小関御祭田遺跡、同第32集 カクシクレ遺跡、同第33集 与島古墳群
各務原市埋蔵文化財調査センター	各務原市文化財調査報告書第21号 坊の塚古墳周濠範囲確認調査報告書、同第22号 村雨町遺跡A地区発掘調査報告書
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 三重県埋蔵文化財センター	瀬戸・美濃系大窯とその周辺 三重県埋蔵文化財調査報告147 安濃津
(財)大阪府文化財調査研究センター	宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡 1992・1993年度発掘調査報告書、(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第1集 西大井遺跡、河内平野遺跡群の動態Ⅲ、大阪文化財研究 第12号、大阪府立近つ飛鳥博物館平成9年度冬季企画展 発掘速報展'98
堺市立埋蔵文化財センター	堺市文化財調査報告第29集、同第32集 鈴の宮Ⅴ、堺市文化財調査概要報告 第59~67冊、平成8年度 国庫補助事業発掘調査報告書
(財)元興寺文化財研究所	元興寺文化財研究所 創立三十周年記念誌
桜井市立埋蔵文化財センター	纏向の時代~最近の発掘調査から~
高根県埋蔵文化財調査センター	島田池遺跡・鶴貫遺跡
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第156集 三原城跡、研究輯録 Ⅶ、年報12

	平成7年度、同13 平成8年度
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	三条黒島遺跡・川西北七条Ⅰ遺跡、国分寺六ツ目古墳、空港跡地遺跡Ⅱ、小山・南谷遺跡、百相坂遺跡
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	埋蔵文化財発掘調査報告書第65集 道後一万遺跡
(財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター 小郡市埋蔵文化財調査センター	松山市文化財調査報告書第53集 古照遺跡、同第60集 釜ノ口遺跡、同第61集 桧山峠7号墳、松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ、朝日谷2号墳 千湯城山遺跡Ⅱ 小郡市文化財調査報告書第102集、苅又地区遺跡群Ⅱ 同第103集、苅又地区遺跡群Ⅳ 同第105集、小郡中尾遺跡2 同第110集、井上南内原遺跡 同第112集、小坂井京塚遺跡2 同第113集、福童山の上遺跡3 同書第114集、埋蔵文化財調査報告書1 同第115集、埋蔵文化財調査報告書2 同第116集、三沢寺小路遺跡 同第117集、西島遺跡5 同第118集
宮崎県埋蔵文化財センター	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第1集 余り田遺跡、同第2集 天神河内第2遺跡、同第3集 白ヶ野第3遺跡B地区、同第4集 霧島遺跡、同第5集 高鍋城跡(嶋田地区)、同第6集 平成8年度 東九州自動車道埋蔵文化財発掘調査概要報告書
平泉町教育委員会	岩手県平泉町文化財調査報告書第39集 平泉遺跡群範囲確認調査報告書、同第40集 平泉遺跡群発掘調査報告書、同第42集 花立Ⅰ遺跡第7次発掘調査報告書、同第45集 志羅山遺跡第26・27次発掘調査報告書、同第46集 柳之御所跡第45次発掘調査報告書、同第47集 平泉遺跡群発掘調査報告書、同第51集 志羅山遺跡第35次発掘調査報告書、同第52集 高田遺跡第1次発掘調査報告書、同第55集 平泉遺跡群発掘調査報告書、同第58集 東北電力鉄塔用地発掘調査報告書
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書第156集 郡山遺跡、同第207集 下ノ内浦・山口遺跡、同第220集 富沢・泉崎浦・山口遺跡10、同第223集 高屋敷遺跡ほか発掘調査報告書
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財調査報告第116集 野木Ⅲ遺跡、同第128集 品川台遺跡、同第162集 柿の内遺跡・下台原南遺跡、同第179集 金山遺跡Ⅳ、同第187集 金山遺跡Ⅴ、同第194集 大曲北遺跡・小橋Ⅰ遺跡、同第197集 藤岡神社遺跡、同第202集 下り松遺跡・二本木A遺跡・二本木B遺跡、同第203集 道下遺跡
足利市教育委員会	足利市埋蔵文化財調査報告第31集 口明塚古墳発掘調査報告書、同第32集 平成7年度文化財保護年報、同第33集 文選第11号墳発掘調査報告書、同第35集 彦谷西山遺跡第1次発掘調査報告書、よみがえる中世寺院一樺崎寺跡の発掘調査一 若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅲ、Ⅳ
坂戸市教育委員会	志木市の文化財第25集 志木市遺跡群Ⅶ
志木市教育委員会	神奈川県埋蔵文化財調査報告39
神奈川県教育委員会	三条市文化財調査報告書第8号 来迎寺遺跡
三条市教育委員会	吉田町文化財調査報告書第4集 中組遺跡発掘調査報告書
吉田町教育委員会	奥三面遺跡群
朝日村教育委員会	吉谷遺跡発掘調査報告、千坊山遺跡(2)、堀Ⅰ遺跡発掘調査報告、小長沢Ⅰ遺跡発掘調査報告、友坂遺跡発掘調査報告Ⅲ、外輪野Ⅰ遺跡発掘調査報告
婦中町教育委員会	富山県大山町原岩跡発掘調査概要 大山町埋蔵文化財調査報告7
大山町教育委員会	松任市宮永ほじ川遺跡、松任市源波遺跡Ⅱ、松任市竹松遺跡、松任市橋爪ガンノアナ遺跡Ⅲ、松任市横江古屋敷遺跡Ⅲ、松任市宮永ほじ川遺跡Ⅱ、松任市平木B遺跡
松任市教育委員会	珠洲市大谷則貞遺跡
珠洲市教育委員会	六之井深池遺跡
池田町教育委員会	江馬氏城館跡Ⅲ
神岡町教育委員会	菊川町埋蔵文化財調査報告書第39集 潮海寺門前町遺跡発掘調査報告書、同第41集 宇藤遺跡群発掘調査、同第42集 小川端Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第43集 潮海寺門前町Ⅱ遺跡発掘調査、同第44集 政所遺跡発掘調査、同第45集 堀田城跡発掘調査、同第46集 長池Ⅱ遺跡発掘調査、同第47集 松ヶ谷遺跡発掘調査報告書、平成8年度 文化財事業年報第4号
菊川町教育委員会	特別史跡 新居関跡調査報告書Ⅱ
新居町教育委員会	三光寺遺跡発掘調査報告書 犬山市埋蔵文化財調査報告書第6集
犬山市教育委員会	

鈴鹿市教育委員会 野洲町教育委員会 中主町教育委員会	伊勢国分寺・国府跡 4 野洲町文化財資料集1997-1 平成8年度野洲町内遺跡発掘調査概要 中主町文化財調査報告書第47集 平成7年度中主町埋蔵文化財発掘調査集報Ⅰ、同第49集 吉地薬師堂遺跡第36次発掘調査概要報告書、同第50集 平成6・7年度 中主町内遺跡発掘調査年報、同第51集 平成8年度中主町埋蔵文化財発掘調査集報Ⅰ
藤井寺市教育委員会 大阪狭山市教育委員会 柏原市教育委員会	ふじいでら歴史シリーズ2 探検 稲作りのはじまり 第4回狭山池フォーラム 末永雅雄の古墳研究 柏原市文化財概報1996-Ⅰ 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1996年度、同1996-Ⅱ 柏原市所在遺跡発掘調査概報 1996年度、同1996-Ⅲ 重要文化財安福寺石棺保存整備事業報告、柏原市の歴史講座1 大県の鉄 1996年度
熊取町教育委員会	熊取町埋蔵文化財調査報告第27集 大久保E遺跡発掘調査概要報告書Ⅰ、同第28集 紺屋遺跡発掘調査概要Ⅰ、同第29集 熊取町遺跡群発掘調査概要報告書Ⅰ
中町教育委員会 田原本町教育委員会	中町文化財報告16 安坂・城の堀遺跡 田原本町埋蔵文化財調査年報5 1994・1995年度、田原本町埋蔵文化財調査概要15 唐古・鍵遺跡第60次発掘調査概報
福岡市教育委員会	博多 福岡市埋蔵文化財調査報告書第126集、南八幡遺跡第1次・三筑遺跡第2次調査同第488集、諸岡B遺跡 同第489集、野方塚原遺跡 同第490集、香椎A遺跡第1次・博多遺跡群第23次 同第491集、原遺跡第1次調査 同第492集、周船寺遺跡群2 同第493集、板付周辺遺跡17 同第494集、三郎丸古墳群 同第495集、藤崎遺跡第2次調査概報同第496集、金隈小津遺跡 同第497集、福岡城跡 同第498集、谷上古墳 同第499集、那珂17 同第500集、麦野C・南八幡 同第501集、下月隈天神森遺跡Ⅳ・那珂君休Ⅴ 同第502集、博多54 同第503集、カルメル修道院内遺跡4 同第504集、西新町遺跡6 同第505集、鋤崎古墳群2 同第506集、大原D遺跡2 同第507集、清末遺跡Ⅲ 同第508集、吉田遺跡 同第509集、重留村下遺跡 同第510集、大橋E遺跡4 同第511集、有田・小田部27 同第512集、有田・小田部28 同第513集、吉武遺跡群Ⅸ 同第514集、博多遺跡群第3次調査 同第515集、入部Ⅶ 同第516集、那珂君休遺跡群Ⅵ 同第517集、那珂18 同第518集、井相田C第6次 同第519集、比恵遺跡群23 同第520集、博多56 同第521集、博多57 同第522集、立花寺B遺跡 同第523集、田村遺跡12 同第524集、那珂遺跡19 同第525集、博多58 同第526集、野多目A遺跡4 同第527集、雑餉隈周辺遺跡群 同第528集、井尻B遺跡5 同第529集、比恵遺跡群24 同第530集、蒲田部木原4次 同第531集、博多59 同第532集、舞松原古墳 同第533集、席田青木遺跡3 同第534集、次郎丸遺跡第2次調査 同第535集、次郎丸高石遺跡第3次調査・免遺跡第2次調査 同第536集、大谷遺跡群 同第537集、有田・小田部29 同第538集、板付周辺遺跡調査報告書第18集 同第539集、松原遺跡 同第540集、小葎遺跡 同第541集、橋本榎田遺跡 同第542集、博多60 同第543集、原遺跡9 同第544集、鴻臚館跡8 同第545集、史跡福岡城跡 同第546集、福岡市埋蔵文化財年報Vol.11 平成7(1995)年度
直方市教育委員会 築城町教育委員会 熊本市教育委員会	水町遺跡群 直方市文化財調査報告書第20集 築城町文化財調査報告書第3集 龍神遺跡群、同第4集 船迫窯跡群 熊本市埋蔵文化財調査年報 第1号 昭和63年度～平成3年度、熊本市埋蔵文化財発掘調査報告書 平成9年度
人吉市教育委員会	人吉市文化財調査報告第17集 史跡人吉城跡Ⅶ
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要 第28号
群馬県立歴史博物館 大田区立郷土博物館 (財)出光美術館 国立歴史民俗博物館 高岡市立博物館 魚津歴史民俗博物館 富山市考古資料館 岐阜市博物館	群馬の遺跡2 発掘最前線'97 弥次さん喜多さん旅をする 出光美術館 館報第100号、出光美術館研究紀要 第3号 国立歴史民俗博物館研究報告 第74集 高岡市立博物館年報第11号 平成8年度 出遺跡発掘調査報告書 富山市考古資料館紀要 第17号 岐阜県博物館調査研究報告第18号

浜松市博物館	九反田遺跡、天王中野遺跡2
名古屋市博物館	館藏品百選
豊田市郷土資料館	梅坪遺跡Ⅳ 豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
斎宮歴史博物館	斎宮歴史博物館研究紀要四～六
滋賀県立琵琶湖博物館	私とあなたの琵琶湖アルバム
滋賀県立安土城考古博物館	長浜ーいにしへ巡礼ー
近江商人博物館	湖東平野の開発
吹田市立博物館	あかりー祭りとくらしー
大東市立歴史民俗資料館	大東市埋蔵文化財調査報告第12集 北新町遺跡発掘調査報告書、同第13集 寺川遺跡発掘調査報告書、北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書
広島県立歴史民俗資料館	掘り出された中世の安芸・備後、川に生きる、研究紀要 第1集、年報第18号 平成8(1996)年度
山口県立萩美術館・浦上記念館	耀州窯展
九州歴史資料館	九州歴史資料館年報(平成8年度)、九州歴史資料館研究論集22
前原市立伊都歴史資料館	再見!糸高の博物館 part 1 古墳時代
熊本市立熊本博物館	熊本博物館館報 No. 9
東京大学	学問の過去・現在・未来 第1部「学問のアルケオロジー」、同第2部「精神のエクスペディション」、同第3部「建築のアヴァンギャルド」、同第4部「知の開放」番組案内、1877▶1977▶1997 東京大学創立120周年記念
明治大学博物館事務室	明治大学博物館年報 1996年度
滋賀県立大学	滋賀県立大学人間文化学部研究報告3号 人間文化3号
神戸女子大学史学会	神女大史学 第14号
天理大学附属天理参考館	天理参考館報 第10号
広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室	帝釈峡遺跡群発掘調査室年報X II
調布市遺跡調査会	調布市埋蔵文化財調査報告34 中耕地遺跡
北青山遺跡調査会	北青山遺跡
千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会	千駄ヶ谷五丁目遺跡
落川・一の宮遺跡(日野3・2・7号線)調査会	落川・一の宮遺跡調査略報Ⅵー1997年の調査ー
府中市埋蔵文化財整理事務所	府中市埋蔵文化財調査報告第18集 武蔵国府関連遺跡調査報告18、同第19集 武蔵国府関連遺跡調査報告19
(財)韓国文化研究振興財団	青丘学術論集 第11集
(株)大功社	渡来人 尾張・美濃と渡来文化
(株)講談社	歴史発掘① 石器の盛衰
(社)日本陶磁協会	陶説 総目次 通巻第1号～第525号
市ノ沢団地遺跡調査団	市ノ沢団地遺跡
上野市遺跡調査会	上野市文化財調査報告50 蓮花寺跡推定地遺跡発掘調査報告、同61 比土遺跡発掘調査報告
重点領域研究「人文科学とコンピュータ」	シンポジウム 人文科学とイメージ処理
(財)古代学協会	古代文化 第49巻第11、12号、第50巻第1号、平安京左京五条三坊八町 平安京跡研究調査報告第19輯
郵政考古学会	郵政考古紀要24
山根徳太郎先生顕彰会	花を求むる心ー日本文化襍考ー
奈良国立文化財研究所	平城宮発掘調査出土木簡概報33 二条大路木簡七、奈良国立文化財研究所年報 1997ーI～III
(財)由良大和古代文化研究協会	由良博士蒐集美術資料選集、奈良県の縄文時代遺跡研究
島根県古代文化センター	しまねの古代文化 第4号

(財)京都市埋蔵文化財研究所	長岡京左京出土木簡一 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第16冊
(財)向日市埋蔵文化財センター	向日市埋蔵文化財調査報告書 第41集
京都府教育委員会	京都府登録有形文化財 松尾神社表門修理工事報告書
野田川町教育委員会	京都府野田川町文化財報告第19集 雲岩寺跡(第4次)・コモ谷遺跡発掘調査概報
三和町郷土資料館	京街道をゆく一丹波・三和の山陰道一
福知山市教育委員会	文化財が語る福知山の歴史
宇治市教育委員会	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第30集 西浦遺跡発掘調査概報、同第35集、同第38集 乙方遺跡発掘調査概報
八幡市教育委員会	上奈良遺跡第2次発掘調査概報 八幡市埋蔵文化財発掘調査概報第22集、同第23集
加茂町教育委員会	加茂岩倉遺跡発掘調査概報 I
京都府京都文化博物館	京都文化博物館調査研究報告第11集 平安京左京六条三坊七町、朱雀 第9集、ヒトの 来た道
京都府立山城郷土資料館	古墳時代の鉄
丹後町古代の里資料館	丹後杜氏誌、京都府丹後町文化財調査報告第13集 史跡産土山古墳発掘調査概要Ⅱ
亀岡市文化資料館	大堰川探検一歴史を知り、自然を感じる一
向日市文化資料館	向日市古文書調査報告書第6集 寺戸区有文書調査報告書、向日市文化資料館報第12号 平成7年度、桂川用水と西岡の村々
城陽市歴史民俗資料館	特別展「鏡と古墳」
京都大学考古学研究会	第48トレンチ
大本山 大覚寺	史跡大覚寺御所跡発掘調査報告
福知山史談会	両丹地方史 第66号
穴沢啄光	考古学京都学派<増補>
大野左千夫	紀北考古学談話会会報 合冊3
鈴木篤英	発掘された北陸の古墳報告会資料集
諏訪昭千代	南九州古代遺跡の考察
土橋 誠	古代祭祀の歴史と文学
中村修身	地域相研究 第12、14、19、20、21号、埋蔵文化財調査室のしおり
林原利明	神奈川県平塚市 諏訪町C遺跡
古田武彦	土佐清水市文化財調査報告書 足摺岬周辺の巨石遺構
森川昌和	続「いろ」の研究ーアジア文化研究所年報1996ー
森島康雄	説銭、説金、湖南考古輯刊 第五、六集、湖南省博物館 四十周年記念論文集、上海博 物館 中國歴代錢幣館、上海博物館 中國古代陶瓷館、鑑賞家 1996年春季号、瓷器、天 下布武への道 信長の城と戦略

編集後記

年度末になり、情報67号が完成しましたのでお届けします。

本号では、職員の研究成果のほか、今年に当調査研究センターが実施した発掘調査の中で特に成果のあった浦入遺跡・内里八丁遺跡・椋ノ木遺跡について詳報を掲載しました。また、資料紹介として、長岡京跡左京第399次調査で出土した櫃について、詳しい考証と検討を掲載することができました。よろしく御味読ください。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第67号

平成10年 3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル
Phone (075)441-3155 (代)



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER